



七
日本立志編

一名修身規範
于河岸貫一著述

二

和装本

□ 9
3739
2



門 口 〇
號 3739
卷 2

日本立志編卷二目次

養志ノ部

志ヲシテ恆ネニ存セシムルハ身ヲ立ツルノ基本ナ

ル丁ヲ叙スル事一丁

第一 源義家兵法ヲ學ビシ事

第二 越前少將舞ヲ觀テ號泣セラレシ事

第三 中江藤樹大學ヲ讀ムテ嘆悟セシ事

第四 長沼宗敬儒學ニ志シ兵學ヲ窮ムシ事

第五 熊澤了介學ニ志シ良師ヲ求メ大ニ其業ヲ成

第六 岡崎季民志ヲ隣家ノ弦聲ニ激勵セシ事

第七 谷松三介勤苦志ヲ求メシ事

昭和十六年一月十一日
尾野貴英氏贈

第八 新井君美貧ニシテ志氣ヲ撓屈セサリシ事 三十二丁

第九 三宅正名同九十郎貧ニシテ苦學セシ事 三十三丁

第十 物徂徠遠志ヲ抱キ一代ノ儒宗タリシ事 三十四丁

第十一 雨森芳洲年八十一始テ和歌ニ志セシ事 三十五丁

第十二 太宰純管麟嶼ヲ規セシ文部ノ事 三十六丁

第十三 吉益東洞貧窶ニシテ毫モ志ヲ拆カサリシ事 三十七丁

第十四 杉山某明ヲ失シテ鑿ニ志シタル事 三十八丁

第十五 谷玄圃明ヲ失シテ後チ詩學ニ志セシ事 三十九丁

第十六 佐久間彦四郎年卅六ニシテ學ニ志セシ事 四十丁

第十七 小川信成勸學文ヲ臨摸シテ學ニ志セシ事 三十五丁

第十八 山中猶平告ケズレテ桑梓ヲ離レシ事 三十六丁

第十九 石作貞十九ニシテ始メテ學ニ志セシ事 三十七丁

第二十 田邊希文孟子ヲ講ズルヲ聞キ志ヲ立テシ事 三十八丁

第二十一 永富鳳介幼ニシテ古人ノ節ヲ慕ヒシ事 三十九丁

第二十二 宮瀬維翰乞食シテ江戸ニ入リシ事 四十丁

第二十三 富士公成章志ヲ專ラニシテ國書ヲ討究セシ事 四十一丁

第二十四 藤鈎寫生ノ妙訣ヲ自得セシ事 四十二丁

第二十五 休翁晚年國歌ニ志セシ事 四十三丁

第廿六 糟谷半之丞篤志ニ由テ國風ニ長セシ事 甲子

第廿七 佐藤隆岷葵章ノ衣ヲ被ルヲ誓ヒシ事 壬子

第廿八 山岡紀一郎志ヲ槍法ニ專ラニセシ事 壬子

第廿九 藤田斌卿年弱冠ヲ踰エテ學ニ志セシ事 甲子

第卅一 宮内卿藤原公成ノ志ヲ述ベシ事 甲子

第卅二 赤松則村ノ志ヲ述ベシ事 甲子

第卅三 赤松則村ノ志ヲ述ベシ事 甲子

第卅四 赤松則村ノ志ヲ述ベシ事 甲子

第卅五 赤松則村ノ志ヲ述ベシ事 甲子

第卅六 赤松則村ノ志ヲ述ベシ事 甲子

第卅七 赤松則村ノ志ヲ述ベシ事 甲子

日本立志編卷二

干河岸 貫一 撰述

養志ノ部

志ヲシテ恆ネニ存セシムルハ身ヲ立ルノ基本ナル
トヲ叙ス

凡ソ人ソ爲スアル。必ズ先ヅ之ヲ為スノ前ニ當テ。將サニ
之ヲ爲サントスルノ志アリ。苟モ其志無キ。恰モ鼓ヲ設ケ
ズシテ射ルガ如シ。而シテ其志ス所昇進ナル者ハ。其至ル
所亦昇進ニシテ。其志ス所高且ツ大ナル者ハ。其達スル所
亦高且ツ大ナリ。故ニ古來有為ノ士ハ。必ズ必ニシテ高遠
ノ志ヲ懷キ。終ニ常人ノ到ル能ハザルノ地位ニ達ス。然レ
バ則チ人間百ノ事業。志ヲ以テ基礎トセザルハ無シ。殊ニ

恠ム今世ノ人士志嚮先ヅ定ラズシテ。或ハ製造物産ヲ興
殖セントシ。或ハ商估貿易ニ從事シテ利ヲ得ントシ。或ハ
文章議論ヲ以テ一世ニ鳴ラントシ。朝夕ニ夜々スル所ノ
事モ。夕べニ已ニ之ヲ厭棄シ。昨ノ敢テ顧ミサリシ所モ。今
ハ頗ル思念ヲ傾ク。是恰カモ基礎無キノ建築ノ如シ。假令
結構宏大ナリト雖。凡忽チ風雨ノ為メニ傾覆シ破壊セン
ノ。夫レ人ノ志ハ。之ヲ養ハザレバ長ゼズ。況ヤ社會ノ風
潮ニ簸蕩セラレ。其志ヲ挫折スルヲヤ。嫩芽ヲ摘盡シテ。其
艸木ノ長生ヲ望ムト何ゾ殊ナラン。而シテ志漸ク長大ナ
ルニ及デハ。勢力當ル可カラズ。三軍帥ヲ奪フベシ。匹夫其
志ヲ奪フベカラズトハ。此之謂ナリ。且夫世人ガ動モスレ
バ。眼前ノ小利ニ眩シ。小安ヲ謀リ。終ニ小成ニ安ンズル者

ハ。他無シ。或時ハ高遠ナル志ヲ起スアリト雖。凡久シク之
ヲ保持セザルニ坐スルノ。其心ニ於テ。大ニ欲スル所ノ
者アツテ存スレバ。何ゾ區々タル利益ト快樂トニ拘泥ス
ルニ暇マアランヤ。而シテ其志ヲ保持スルニ就テハ。其眼
ニ遮リ。其耳ニ觸ル。所ノ者ヲ取テ以テ之ヲ培養シ。之ヲ
長大ニスルノ工夫ヲ為サザル可カラス。本篇ニ列叙スル
所ノ者ハ。則チ前哲先輩ノ志ヲ立テ。之ヲ保持セシ所ノ
事蹟ニシテ。人世事業ノ基礎ヲシテ。牢固ナラシメザル可
カラザルヲ證明スルニ足ル者タリ。冀クハ今世ノ人士ガ
志ヲ移動シ易キノ宿痾ヲ療スルノ藥石ト為リ。後進ノ輩
ガ其志ヲ培養スルノ肥糞ト為ランコトヲ。

第一 源義家兵法ヲ學ビレ事

源義家ハ伊豫守頼義ノ長子ナリ。幼名源太。八幡太郎ト稱ス。人ト爲リ勇決英果ニシテ。騎射神ノ如シ。頼義ニ從テ安倍貞任ヲ陸奥ニ擊テ之ヲ誅ス。康平六年功ヲ以テ從五位下ニ叙シ。出羽守ニ任ズ。嘗テ京師ニ在リ。關白頼道ノ第ヲ過ギ。陸奥ノ戰爭ヲ談ス。博士大江匡房別室ニ在リ之ヲ聞テ曰ク。好男子惜クハ未ダ兵法ヲ知ラズ。從者微カニ其語ヲ聞キ。愠テ義家ニ語ル。義家曰ク。其或ハ然ラント。匡房ノ出ルヲ見。其車ニ就テ之ヲ拜ス。遂ニ就テ學ブ。永保三年。陸奥守ニ任ジ。鎮守府將軍ヲ兼ヌ。時ニ藤原家衡。藤原清衡ト。清原真衡ト。兵ヲ構フ。義家急ニ任國ニ赴キ。真衡ヲ助ケ。家衡ヲ出羽ニ攻メテ利アラズ。家衡ノ叔父武衡モ亦家衡ニ應ズ。兵ヲ合セテ金澤ノ柵ニ據ル。寛治元年。義家自ラ數萬

騎ヲ率井之ヲ攻ム。柵ヲ距ツル數里。鴻雁ハ行ヲ亂ルヲ望ミ見テ曰ク。是レ必ズ伏アルナリト。之ヲ搜ムレバ果シテ然カリ。衆ニ謂テ曰ク。兵法ニ言フ鳥亂ルハ者ハ伏ナリト。我レ學バザレバ則チ殆シ。弟義光ノ京師ヨリ來ルニ會ス。義家大ニ悅ビ。カヲ戮ハセ柵ヲ攻メテ之ヲ屠ル。陸奥出羽悉ク平ク。義家父祖ノ業ヲ兼ケ善ク將士ヲ撫ス。其陸奥ヲ征スル前後十二年。東國ノ民皆其恩威ニ服シ。稱シテ八幡公ト曰フ。野三初天皇ノ御時。爲テ義家ヲ櫻所子曰ク。義家朝臣ノ兵法ヲ江帥ニ問ヒ。雁行ノ亂ルヲ見テ。伏アルヲ知リタル事實ノ如キハ。固ヨリ人口ニ膾炙スル所ニシテ。喋々論評スルヲ須井ズ。然リト雖。臣閉目沈思シテ當時ノ光景ヲ追憶セバ。義家結髮シテ東征シ。櫛

風沐雨九年ノ戰鬪ヲ經テ遂ニ凱旋シ。一日菟道ノ關白ノ
前ニ於テ戰功ヲ説ク從卒博士ノ言ヲ聞キ劍ヲ按ジテ其
多口ヲ憤ル亦宜ナリ然ルニ義家敢テ忿ラザルノミナラ
ズ其鈴韜ニ遠キヲ知ルヲ以テ車下ニ磬折ス夫レ江帥ハ
三朝ノ侍讀トシテ後三條天皇ノ即位ニ及ビ存リニ弊
政ヲ革メ治ヲ延喜ノ隆時ニ比スルニ至リシモノ與カツ
テカアリト稱ス然レバ則チ江帥ノ誨ユル所管ニ風雲正
奇ヲ極ムルノミナラズシテ義家ノ材亦固ヨリ徒ニ父ノ
書ヲ讀ムノ類ニ非ズ應サニ學ブ所伏ヲ察ルヨリ大ナル
者アルヤ疑ヒヲ容レザルナリ而シテ其雁行ノ亂ルヲ
見テ伏ヲ知リシガ如キハ固ヨリ偶然ナルノミ且ツ夫レ
義家十有二年ノ征役ニ從事シ八州ノ精銳其指麾ニ從フ

地拔ヲ占ムルモ位正四位下ニ過キス官鎮守府將軍左衛
門督タルニ過ギズト雖モ少クモ不滿ノ色無キモノ豈ニ
耐忍ノ力他ノ武勲アル人々ニ超過スル者ニ非ズヤ而シ
テ其基業裔孫ニ及ビ覇府ヲ鎌倉ニ開クニ至リシ者亦此
耐忍ノ餘慶ト謂フベシ功高フシテ官ノ卑キヲモ敢テ憤
鬱ヲ懷カザルノ氣象ハ江帥ノ好男子未ダ兵法ヲ知ラズ
ト云ヒシヲ從者ニ聞クモ敢テ怒ラズ其出ルヲ見テ車
下ニ磬折スル事ニ於テ之ヲ見ルニ足レリ嗚呼英武義家
ノ如クニシテ耐忍義家ノ如クナル子孫必ズ興ル者アラ
ントノ遺言果シテ空シカラザリシモノ亦故アルナリ今
ヤ開明ノ隆運ニ屬シ知識ヲ殊邦異域ニ求メラル然ルモ
猶ホ世ノ人士事務家ト理論家ト互ヒニ相嘲ケリ即チ事

務家ハ理論ハ則チ然リ然リト雖凡未ダ實際ニ適合セザルナリ我曹ハ曾テ經驗スル所ナリト云フノ語ヲ以テ論士學者ノ言ヲ遮斷スルノ堅寨トシ理論家ハ今古中外ノ史典ヲ引テ事正理ニ契ハザル者ハ永遠ニ行ハルベキ者ニ非ス苟且緩漫ハ事務家ノ習弊ナリト云フノ言ヲ以テ之ヲ刺衝スルノ鍼砭トス其見ル所各一方ニ偏シテ終ニ氷炭相容レザルヲ致ス者ノ如シ之ヲ義家ノ兵法ヲ江帥ニ問フニ比スレバ其度量ノ廣狹日ヲ同フシテ語ルベキニ非ス何況ヤ已レガ勲功ニ誇ヨリ偶其論ハ協ハザルアレバ直チニ官ヲ罷メ去テ私カニ黨與結合シ私憤ヲ干戈ニ訴フルモノ前後相踵ギタルガ如キ其首魁タル者何ゾ義家ノ爲ス所ヲ追思シテ愧死スルヲ知ラザリシヤ夫

レ古ヲ尊ビ今ヲ賤ムハ東洋諸國ノ通弊ナリト雖凡徒ニ今ヲ尊ムテ古ヲ賤ム亦其弊無キニ非ズ試ミニ視ヨ勇決英果ニシテ而シテ耐忍勉強ナル義家ノ如キハ今世ト雖凡容易ク得ベカラザルナリ容易ク得ベカラザルノミナラズ之ヲ學ブ者ト雖凡亦得易スカラズ徒ニ今ヲ尊ムテ古ヲ賤ムヲ如キ我ハ服セズ

第二 越前少將舞ヲ觀テ涕泣セラレシ事

天正時代、妓阿國ト稱スル者アリ、妙麗ニシテ善ク舞フ、名京畿ニ嘖々タリ、少將秀康ノ伏水ニ在ル、其技ヲ觀シト欲シ、召シテ之ヲ客館ニ致ス、阿國頸ニ繫ルニ水晶ノ念珠ヲ以テス、少將其品ノ稱ハザルヲ意ヒ、珊瑚ノ念珠ヲ賜ヒ以テ之ヲ寵ス、既ニシテ阿國進ムテ其技ヲ奏ス、羅衣風ニ從

と長袖交横ハリ其宛轉ノ妙ヲ極ム少將凝視スル者久シ
因テ大ニ涕泣ス左右恠ムテ其故ヲ問フ少將乃チ曰ク渠
裙釵ノ派ト雖モ既ニ天下第一ノ名ヲ成ス我ハ則チ堂々
タル一丈夫ニシテ曾テ海内一人ト稱セラルハヲ得ズ豈
能ク羞テ泣カザランヤト

櫻所子曰ク大丈夫ノ志ヲ立ル所謂聖人君子英雄豪傑ノ
言行ヲ聞クヲ以テノミナラズ其耳目ニ感觸スル所皆以
テ其志氣ヲ激勵スルニ足ル少將ノ豪邁ナル上杉景勝ガ
天下ノ勁敵ト稱スルモ自ラ一人ヲ以テ之ニ當ランコトヲ
請ヒ誓テ白川ノ關ヲ越ユル一步ナラシメズ然リト雖モ
當時勇武老鍊其人ニ乏シカラズ少將未ダ海内一人ノ聲
譽ヲ得ル能ハズ是レ一舞妓ヲ觀ル亦以テ其豪壯ノ氣ヲ

激發スル所以ナリ古ヘニ曰ク君子ハ義ニ喻トリ小人ハ
利ニ喻トルト少將ノ如キ武夫ハ則チ勇ニ喻トルト謂フ
ベキナリ今世俳優講談師等ノ如キ天下第一ノ名ヲ擅ス
ル者アリ學術技藝ヲ講究スル人其技ヲ見其名ヲ聞キ羞
ぢ且ツ泣テ發憤激勵スルアラバ必ズ功名ヲ成スノ日ア
ルベシ宜ク其好ム所ニ就テ喻トル所アルベキナリ何ゾ
必ズシモ小人君子武夫ノ利ヲ義ト勇トニ喻ルアルノミ
ナランヤ

第三 中江藤樹大學ヲ讀ムテ嘆悟セシ事
中江藤樹小字ハ與右衛門其祖ハ加藤侯ノ臣ニシテ其父
ハ農ニ隱ル祖ニ先テ没ス祖乃チ藤樹ヲ拉シテ伊豫ノ大
洲ニ之ク藤樹童トニシテ老成ノ如シ年甫ハテ十一一日

大學ヲ讀ミ天子ヨリ以テ庶人ニ至ル壹ニ是レ皆ナ身ヲ
修ムルヲ以テ本ト為スト云ニ至リ嘆悟シテ曰ク幸ニ此
經ノ今ニ存スル聖人豈ニ學ムテ至ル可カラザル者ナラ
ンヤト年十七京師ノ僧來テ論語ヲ講ズ是時ニ當リ大洲
ノ俗惟武弁是レ競ヒ敢テ從學スル者無シ獨リ藤樹日夕
往テ聽ク僧居ルト僅カ一月餘ニシテ去ル因テ四書大全
ヲ得テ之ヲ讀ム而シテ往々僚友ノ為メニ毀謗セラル是
ニ於テ晝ハ則チ深ク之ヲ藏メ夜ニ至テ始メテ卷ヲ開ク
藤樹躬行ヲ先ニシ文詞ヲ後ニシ毎ニ四民ヲ引テ之ヲ訓
誨ス人賢愚ト無ク皆其德ニ服シテ善ニ興起セザルハ無
シ篤學修行ヲ以テ聲名海内ニ施ク大洲ヲ去テ近江ニ來
リ母ヲ養フニ及ビ公侯辟召シ玉帛禮ヲ具シテ之ヲ聘ス

レ氏峻拒シテ應ゼズ郷黨里閭皆チ其德ニ薰ジ商賈
氏得ルヲ見テ義ヲ思ヒ旅舍茗肆ノ若キ客遺ル所ノ物
アレバ則チ必ズ之ヲ閣上ニ置キ以テ遺者ノ復夕來ルヲ
俟ツ年ヲ歷ルノ後チ塵土空滿スルニ至ル煙管煙色ノ類
ト雖氏竟ニ収用セズ其此ノ如クナルヲ以テ郷閭舉ゲテ
藤樹ヲ尊稱シテ聖人ト為ス其聖人豈ニ學ムテ至ル可カ
ラザル者ナランヤノ言果シテ驗アリ
某州ノ一士人藤樹ノ故里ヲ經過シ其墳塋ヲ弔セント欲
ス路ヲ農夫ニ問フ農夫即チ耒耜ヲ舎テ徑チニ趨テ屋ニ
入り更メテ潔服ヲ著ケテ出ヅ士之ニ跟シテ行ク既ニシ
テ墓前ニ至ル農夫拜掃甚ダ恭シ士心ニ之ヲ訝カル因テ
問テ曰ク爾チ藤樹ニ於ケル何ノ親故アリテ敬禮乃チ爾

ルヤト農夫曰ク藤樹先生ヲ欽仰スル豈ニ惟余ノミナラ
ンヤ闔邑皆然カリ父老毎ニ其子弟ニ語テ曰ク吾里父子
禮アリ兄弟恩アリ室ニ忿疾ハ聲無ク面ニ和煦ハ色アル
者職トシテ藤樹先生ノ遺教ニ由ルナリ此レ一人トシテ
其恩ヲ戴カザル無キ所以ナリト是ニ於テ士容チヲ變ジ
テ曰ク世稱シテ近江聖人ト為ス吾乃チ今ニシテ其虚讚
ニ非ルヲ知ルナリト即チ其墓ヲ敬拜シ厚ク農夫ニ謝シ
テ去ル又藤樹ト同里ノ人江戸ニ於テ某家ヲ嗣グ一日客
アリ語次儒ニ及ブ客問テ曰ク中江藤樹ハ子ノ里人ナリ
聞ク其學世ノ仰グ所トナルト子必ズ其行誼ヲ詳カニセ
ン請フ吾ガ爲ニ語レト其人容チヲ改メテ曰ク藤樹先生
ハ吾ガ先子ノ師事スル所ナリ因テ其平生ヲ悉クセリ實
ニ近江聖人ノ名ニ堪カズ我レ出デ、此家ノ後タルニ及
ビ先子其什籛スル所先生ノ墨蹟一張ヲ將テ我ニ付シ且
ツ戒勅シテ曰ク此ハ是レ聖人ノ手澤兒善ク之ヲ藏メ知
ラザルモノヲシテ汚サシムルヲ勿レト今吾子先生ヲ慕
ハバ則チ之ヲ觀ルヲ得セシメント乃チ起テ禮服ヲ更
メ着ク一軸ヲ櫃ヨリ出シ捧ゲテ案頭ニ置キ頂禮跪拜ス
ル猶ホ緇徒ノ佛像ヲ崇ムルガゴトシ客始メテ敬ヲ起シ
以爲ク藤樹ハ畎畝ノ一匹夫ナリ而シテ士大夫ノ聞ニ重
ンゼラル、下此ノ如クナレバ則チ其道德世ノ所謂儒者
ト迫カニ同ジカラス豈ニ禮セサルヲ得ンヤト盥嗽再
拜シテ後チ之ヲ觀タリシトイフ

櫻所子曰ク藤樹ノ篤行力學ヲ以テ近江聖人ノ名ヲ得其

墳墓及ヒ墨蹟ニ至ルマテ崇敬セラル、若其初メ大學ヲ讀ミ天子ヨリ以テ庶人ニ至ル壹ニ是レ身ヲ修ムルヲ以テ本ト為スノ語ニ至リ聖人豈ニ學ムデ至ルベカラザル者ナランヤト感悟シ志ヲ勵マシテ修鍊セシニ由レリ思フニ元和韃索以來圭運漸ク旺リニシテ學問文章以テ一世ニ泰斗タル者其人多シ而シテ篤行ヲ以テ稱セラル者獨リ翁ト仁齋伊藤氏アルノミ然ルニ翁ノ門熊澤蕃山ノ如キ俊傑ヲ出スヲ以テ視レバ其決シテ謹直ナル一漢學老翁ニ非ズシテ必ズ經世濟民ノ學術アリシヲ知ルベシ唯其躬行ヲ先トシ貧賤ニ素シテ貧賤ヲ行ヒ敢テ放言高談以テ人ノ目目ヲ駭カスガ如キヲ為サバノミ吁孟子ノ所謂人ミナ以テ堯舜タルベシトノ語ハ決シテ言

フベクシテ行フベカラズトセンカ恐クハ行フベカラザルニ非ズ行ハザルノミ然レバ則チ舜タリ跖タル唯其人ノ初志如何ニ在リ且夫レ藤樹ハ家貧フシテ論語ノ講ヲ聽ク月餘ニシテ後チニ四書大全一部ヲ以テ師トセシモ遂ニ其躬行心得彼レガ如キニ至ル今ノ書生内地ノ人ハ從テ學フニ足ラズトシ往々碧眼ノ歐客ヲ師トシ若クハ英京佛都ニ多年留學シ一ノ得ル所無キ者ノ如キ若シ翁ヲシテ之ヲ見セシメバ或ハ當サニ驚死スベシ

第四 長沼宗敬儒術ニ志シ兵學ヲ窮メシ事

長沼宗敬澹齋ト號ス信濃松本ノ人長沼五郎宗政ノ裔ナリ澹齋四歳ニシテ父ヲ喪ヒ丹波守戸田侯ニ明石ニ從ヒ又侯ニ從テ加納ニ移ル年十五ニシテ仕ヘテ近習トナル

祿百石、十六歳ニシテ上疏シテ事ヲ言フ、後チ又讜言ヲ進
ムルモノ數、卒ニ合ハズシテ去リ、江戸ニ赴キ、又筑後ノ國
主有馬侯ニ仕ヘ、二百五十石ヲ食ム、寛文八年、祿ヲ辭シテ
復タ仕ヘズ、初、澹齋ハ加納ニ在ルヤ、僧寺ニ遊ビ、字ヲ習
フ、旁兒ノ小學ヲ讀ムヲ聞キ、輒チ能ク之ヲ記ス、僧為メニ
其文ヲ摘ムデ講解ス、澹齋大ニ悦ビ、是ヨリ志ヲ儒典ニ傾
ケ、篤ク洛陽ノ説ヲ信ジ、持敬ヲ以テ主ト為シ、聖賢ヲ以テ
必ズ及ブ可シト為シ、經術ヲ精研シ、旁ラ甲州ハ兵法ヲ學
ブ、既ニシテ曰ク、世傳フル所武田氏ハ兵法ナル者、多クハ
小幡景憲輩ガ割裂彌縫スル所ニシテ、當時ハ信傳ニ非ル
ナリ、吾武門ノ精トシテ以テ正サバ、ル可カラズト、是ニ於
テ古今ノ韜鈴ヲ鑽極シ、身戎陣ヲ經ル者アルヲ聞ク、必ズ

往テ之ヲ質ス、銃馬曲藝、築城ノ制ニ至ルマデ、窮究セザル
ナシ、諸レヲ三代師律ノ意ニ原シ、諸レヲ孫吳七子ニ參シ、
下モ明將愈戚ノ法ニ替シ、時宜ヲ量カリ、實効ヲ驗シ、網羅
參伍シ、明辨精遴シテ、兵要錄二十二卷ヲ著ハシ、以テ一家
言ヲ建ツ、其大要ハ射馭刀槍之ヲ本邦ニ原シ、節制紀律之
ヲ漢土ニ取リ、大小火器ノ法則ハ西洋ヲ參用ス、嘗テ門生
ニ語テ曰ク、吾錄三分ハ書ナリ、一分ハ口訣ニ在リ、五分ハ
則チ學者ノ自得ニ在ルノミ、後來善ク之ヲ用ユル者アル、
必ズ我法ヲ株守ス可カラザルナリト、其最モ深ク悟ル所
ノ者ハ、風后ガ握奇、武侯ガ八陣ナリ、握奇ハ陣集解ヲ述ベ、
以テ公孫弘、獨孤及輩ノ失ヲ糾シ、李靖、趙本學等ノ未ダ備
ハラザル所ヲ補フ、一時聲譽海内ニ高シ、諸侯爭ヒ請フテ

師ト為ス。然レ氏澹齋兵家ヲ以テ自ラ名トスルヲ欲セズ。又侯門ニ奔馳スルヲ喜バズ。其請ニ應ズルニ三家ヲ以テ限リト為ス。先ヅ儒經ヲ説キ。然ル後チ武ニ及ブ。備前少將光政其著書ヲ看ルヲ請フ。乃チ出師篇ヲ抽テ呈覽ス。少將深ク之ヲ嘉ミシ。歎ジテ曰ク。予ガ齒尚ホ壯ナラシメバ。將サニ斯人ニ從テ遊バントス。今老テ及ブナシト。乃チ其臣日置伊右衛門ヲシテ從學セシム。明石ノ城主松平若狹守直明客禮ヲ以テ之ヲ延キ。班ヲ國老ニ列シ。政務ヲ與カリ。聞カシム。居ル五年。去テ山城伏見ニ隱ル。元祿三年五十六ニシテ歿ス。其門ニ學ブ者。後先數百千人。其尤モ著ハル者。佐枝尹重。宮川尚古。二人ノ學。分レテ兩派トナル。長沼流ハ兵學ト稱シテ。久シク世ニ行ハレシ者。即チ澹齋ヲ祖述スル者ナリトイフ。

櫻所子曰ク。澹齋ノ生ル。韃索ノ後ニ在ルヲ以テ。人或ハ其書ヲ賤シ。凡上ノ空談ト為スト。雖氏江帥ノ門下ニ義家アリ。趙本學ノ弟子ニ俞大猷アリ。學ノ以テ已ム可カラザルヤ。此ノ如シ。今ヤ歐洲ト交通セシヨリ。兵家ノ法制一變スト。雖氏澹齋ノ學。傳テ徳川氏ノ李世ニ及ブマデ。大ニ世ニ行ハル者。亦其篤志力學。凡常ナラザルヲ見ルニ足レリ。

第五 熊澤了介學ニ志シ良師ヲ求メ大ニ其業ヲ成ス

熊澤了介。名ハ伯繼。小字ハ治郎八。後チ助右衛門ト改ム。蕃山ト號ス。父ヲ野尻藤兵衛一利ト曰フ。一利初メ加藤嘉明

ニ仕テ後チ官ヲ罷メテ京都ニ寓ス。熊澤氏ヲ娶リ、元和五年ヲ以テ了介ヲ平安五條ニ生ム。外祖守久養テ嗣ト為ス。因テ熊澤氏ヲ冒カス。寛永十一年了介歳甫メテ十六、京都ノ所司代板倉侯備前侯少將光政ニ囑シテ之ヲ擧グ。備侯驟眷遇ヲ加フ。偶島原ノ賊起ル、侯幕府ノ命ヲ奉ジ、江戸ヨリ歸リ、兵ヲ治メ以テ應援ニ備フ。是時了介年十八、猶本年少ナルヲ以テ東邸ニ留ル、乃チ請ハズシテ岡山ニ歸ル。軍律ヲ干カスヲ以テ罪ヲ獲タリ、了介歳二十、自ヲ以為ク公事監キ、下靡シ、寧處ニ違アラズ、何ゾ以テ文武ヲ講習スルヲ得ン。此ハ若クニシテ身ヲ終フル固ヨリ吾志ニ非ルナリ、今ヤ執ヒ將サニ俸祿ヲ増賜スルノ命アラントス。然ルガゴトクンバ則チ如何ゾ命ヲ拒ムヲ得ンヤト、遂ニ近江

ノ桐原ニ隱ル、歳餘始メテ四書ヲ讀ム。朱註ニ據テ其義ヲ研窮ス。又京ニ赴テ良師ヲ求ムレド未ダ其人ヲ得ズ。其二宿ヲ投ズル者一人語テ曰ク、往日余主ノ為メニ遠ク行ク、時金二百兩ヲ懷ニス、即チ主ノ齋ラセシムル所ナリ、途ニシテ驛馬ニ跨ガリ、金ヲ出シテ鞍ニ繫グ、日暮之ヲ収ムルヲ忘レテ宿ニ困頓シテ枕ニ就ク、半夜初メテ覺ム、乃チ金ヲ遺ルヲ覺トル、則チ茫然トシテ、猶ホ疑フテ夢寐ト為ス、既ニシテ神乃チ定リ、痛心疾首、千思萬慮スレドモ之ヲ求ムルニ術無ク、一ニ死ヲ維經ニ決ス、戚然トシテ自ラ天ノ平恤スル所トナラズシテ、此悲涼ニ逢フヲ歎ズ、時ニ剥啄ノ聲甚ダ急ナルヲ聞ク、之ヲ問ヘバ則チ稱ス、馮夫某ナリト、因テ亟カニ出ヅ、渠レ即チ金ヲ出シテ曰ク、小子

家ニ歸テ將サニ馬ヲ洗ハントス。鞍ヲ解クニ及ンデ之ヲ得タリ。是レ君ノ遺ル、所ナリ。故ニ來テ還呈スト。封完キ。故ノ如シ。吾驚喜措ク所ヲ知ラズ。腰纏別ニ十六兩アリ。即チ解テ以テ之ヲ謝ス。馬夫受ケズシテ曰ク。君ノ物君ニ付ス。奚ノ謝カ之レアランヤ。然レ氏夜ヲ冒シテ來ル。此賃二百文ヲ得レバ足レリト。吾曰ク。孽ヒ自ラ作ス。汝チ發義ノ心ナクンバ。吾生ヲ得ルノ地無シ。所謂死ヲ生カレテ骨ニ肉スルナリ。不腆ノ黃物。敢テ報ト云ニハ非ズ。聊カ以テ寸心ヲ表スト。馬夫愈辭ス。乃チ八兩ヲ減ズ。亦受ケズ。稍々減ジテ纔カニ二方金ニ至ル。馬夫執ルヲ益確シ。曰ク。君我ヲ溷ルヲナカレ。予守ル所アレバナリト。吾歎ジテ問テ曰ク。欲ニ淡キ者。今ノ世多ク見ス。其義ヲ以テ利ト為ス。汝チ

ガ如キニ至テハ。則チ絶テ得ベカラズ。所謂守ル所ノ者トハ何ゾヤト。曰ク。賤役口ヲ餽ス。豈ニ利ヲ思ハザランヤ。而シテ中江與右衛門(藤樹)ト云者アリ。里中ニ教授ス。嘗テ其言ヲ聞クニ曰ク。誠正以テ其身ヲ修ム。君ニ事フルニ忠ヲ致シ。親ニ事フルニ孝ヲ盡シ。貧ヲ以テ濫ルナカレ。賤ヲ以テ枉ルナカレト。今若シ賜フ所ヲ以テ之ヲ利トセバ。則チ此心ヲ欺クナリト。言畢テ去ル。噫。澆季ノ世安ンゾ。此人アルヲ得ンヤト。了介傾聽スルヲ良久フシテ曰ク。馬夫ハ一郷ノ鄙人ノミ。素ト道ノ何物タルヲ識ラズ。利ニ趨ルヲ驚ルガ若シ。何ノ義カ之レ。思ハンヤ。而メ其廉潔古ノ君子ニ愧ザル者。必ズ教育ノ致ス所ナリ。所謂中江與右衛門氏ナル者。其德ト學ト想ヒ見ル可キナリ。今ノ世ニ方テ。此

人ヲ捨テ、誰ニカ適從セシヤト。是日即チ束裝シ、往テ謁
シ、業ヲ門ニ受ケシトテ請フ。藤樹辭スルニ、人ノ師トナル
ニ足ラザルヲ以テス。了介益請フテ置カズ。二夜其無下ニ
寢タリ。藤樹ノ母之ヲ見、藤樹ニ謂テ曰ク、人遠方ヨリ來ル
懇請此ノ如シ、之ニ習フ所ヲ傳フルモ、誰カ好ムデ人ノ師
ト爲ルト謂ハシヤト。是ニ於テ始メテ接客ス。時ニ寛永十
九年、了介年二十四ナリ。明年一利江戸ニ適キ仕ヲ求ム。了
介ハ則チ弟妹八人ト留リテ共ニ母ニ事ス。家甚ダ貧シ、毎
ニ米、糝糠ヲ粥ト為シテ之ヲ食ラヒ、冬ニカテハ紙襖ヲ
以テ寒ヲ禦グ。刻苦スル。了介茲ニ三四年、人或ハ之ニ勸ムル
ニ仕官ヲ以テシ、謂テ曰ク、子が家數口アリ、恐クハ將サニ
飢ニ及バントスト。了介肯シセズ。正保二年、了介年二十七。

學識愈高シ、備前侯素ヨリ其材ノ凡常ナラザルヲ知リ、欽
慕シテ止マズ。京極侯ヲ煩ハシテ旨ヲ諷シ、以テ了介ヲ聘
ス。是ニ於テ了介復岡山ニ來ル。了介ノ岡山ヲ去ル凡ソ八
年ニシテ還ル。居ル一ニ歳、侯了介ヲ以テ大隊ニ充テ、三百
石ヲ給ス。同僚皆了介ニ矜式ス。後チ擢デ、騎隊帥ト為シ、
藩政ヲ與カリ聞カシメ、祿三十石ヲ増賜ス。是ニ於テ了介
乃チ侯ニ告ゲ、一年食ム所ノ邑入ニ三倍シ、以テ之ヲ償サ
レントテ請フ。蓋シ其秩祿ノ當サニ裁スベキ所ノ兵器ヲ
具ヘント欲スルナリ。侯之ヲ許ス。後チ幾クモ無ク償還ス。
了介侯ニ謂テ曰ク、藩制四疆ノ要害處分、騎隊帥以テ之ヲ
保チ、大隊ノ士二十人之ヲ屬セシメント、備作播ノ境界、犬
牙相接ス。侯乃チ了介ヲ以テ之ヲ當ツ。了介曰ク、某聞ク治

ニ處テ亂ヲ忘レズ。古ヘハ士咸ナ私邑ニ在リ武備焉ヨリ
 善キハナシ。然レバ則チ法今遽方ニ復レ難シ。某請フ先ツ
 之ヲ効シ、以テ緩急ニ備ヘント。侯之ヲ可トス。是ニ於テ國
 士若干ヲ簡ビ、匹馬單槍以テ諸レヲ便宜ノ地ニ處ク。是歲
 了介年三十二。慶安三年。侯ノ述職ニ扈シテ江戸ニ適キ。騎
 隊帥ヲ以テ宰臣ノ事ヲ攝行ス。名聲藉甚ニシテ信服スル
 者多シ。紀州侯幕府ノ宗室ヲ以テ了介ヲ敬禮スル。送迎必
 ズ。門ニ及ブ。松平伊豆守。久世大和守。板倉内膳正。堀田筑前
 守。淺野因幡守。中川山城守。水野周防守。本多下野守。松平日
 向守等ノ諸侯。其他名門右族。爭テ之ヲ延ク。將軍家光公。了
 介ノ學識アルヲ聞キ。將サニ召見セントス。尋テ薨去セラ
 レシヲ以テ果サズ。後チ侯ノ江戸ニ述職スルヤ。或ハ扈シ

或ハ留マル兼應三年。備前洪水アリ。明曆元年。大ニ饑エ。封
 内ノ民死スル者九萬人ト云フ。侯大ニ之ヲ憂ヒ。乃チ諸老
 臣ニ屬シテ謀議セシム。衆論決セズ。了介曰ク。緩議日ヲ移
 サバ。恐ラクバ餓草塗ニ載ツルヲ致サント。是ニ於テ大ニ府
 庫ヲ開キ。以テ困窮ヲ賑ハス。然レモ奉行者。或ハ遲緩旨ニ
 違フヲ以テ了介乃チ自ラ巡按シ。德施疆内ニ普ベシ。民因
 テ蘇息ス。是ヨリ先キ岡山。山城。東西ノ村落。毎ニ盛暑ニ方リ。
 水ノ涸ル。ニ困ム。了介曰ク。是諸山密樹繁陰ノ大氣ヲ蓄
 ヒ。雲雨ヲ醸ス。無キヲ以テノ故ナリト。是ニ於テ田賦ヲ照
 科シ。壯丁ヲ調發シ。松數千株ヲ秦山ニ樹ク。培養法ヲ得。歲
 ヲ逐テ繁茂ス。是ヨリ九夏雨多クシテ。近村未ダ嘗テ旱魃
 ノ患アラズ。又令ヲ下ダシテ。川ノ兩邊ノ山水ヲ伐ルヲ禁

日本立志系 卷之二 十一

ズ。曰ク山不毛ナレバ。則チ雨水保タズ。直チニ土積ヲ流ガ
シ。川隨テ淺シト。凡ソ封内池ヲ穿チ隄ヲ築キ。溝渠ヲ開キ。
漕運ヲ便ニスル等ノ事。概ネ馬上之ヲ望ム。利害ヲ較量ス。
數十年ノ後チ。其言皆中々ラザルハナシト云フ。

了介ノ西歸スルニ及ビ。往テ板倉侯ニ謁ス。侯曰ク子ハ明
主ニ仕ヘ。言聽カレ計從ハル。吾徐口ニ之ヲ籌カルニ。子其
終リヲ善セント欲セバ。則チ早ク致仕シテ。田里ニ屏處セ
ヨ。今ヨリ後チ復タ世事ヲ言フ勿レ。此レ功成リ身退クノ
義ナリト。了介拜謝シテ去ル。然レ凡眷遇ノ渥キ。俄カニ骸
骨ヲ乞フヲ得ズ。加フルニ濟世ノ志自ラ已ム能ハザルヲ
以テス。且ツ命ヲ奉ジテ復タ江戸ニ赴ク。是時既ニ事ヲ共
ニスル者ト隙アリ。了介亦自ラ安ンゼズ。明曆二年。侯木谷

ニ持ス。了介躓レテ崖ヨリ墜チ。手足ヲ傷ク。是ニ由テ致仕
ヲ乞フ。和氣郡寺口ハ。其食邑ナルヲ以テ。此ニト居シ。蕃山
ト號ス。蓋シ新古今集ニ載スル。源重之ノ歌ニ。筑波山はや
ま。志げやま。志げやま。おむひ。おむひ。おむひ。おむひ。おむひ。おむひ。
ト。王陽明ガ立志ノ說。此歌ハ意ニ符ス。而シテ。志げやまハ
蕃山ナリ。故ニ以テ號ト為スト云ス。

了介既ニ嘉遯ニ志アリ。侯微カニ其情ヲ知ルト雖。然カ
モ強テ止ムベカラズ。又意之ヲ留メント欲ス。是ニ於テ公
子政興ヲシテ其祿ヲ襲ハシメ。後ト為ス者ノ如シ。是歲萬
治元年。了介年四十。遂ニ疾ヒテ以テ骸骨ヲ乞ヒ。去テ京師
ニ寓ス。而シテ一條右府。中院大納言。清水谷大納言。油小路
大納言。中御門。中納言。野々宮黃門。押小路參議。伏原參議等。

其他貴紳其學ヲ慕ヒ東脩ヲ行テ來學シ佩玉鏘々車馬門
ニ滿ッ聲華一世ヲ蓋フ居ルノ之ニ頃クス或人了介ヲ所
司代牧野侯ニ諧ス牧野侯之ヲ信ジ了介ヲ忌ム寛文七年
ノ春遂ニ行テ大和ノ芳野ニ隱ル然而ノ又去テ廬ヲ山城
ノ鹿背山ニ結ブ客アリ問フテ曰ク先生頃者聞アリヤ否
ヤト曰ク吾善ヲ為ス惟レ日足ラズ何ハ閑暇カ之レアラ
ント客曰ク今日善ヲ為スモ其跡何ニ由テカ見ハレンヤ
ト了介毅然トシテ曰ク人苟モ志ヲ義ニ立ツレバ則チ盥
嗽櫛縫モ皆善ニ進ムノ地タリ若シ然ラズンバ一夕比九
合ヲ匡スモ亦復兒戲土羹ノミト客曰ク善哉ト他日又問
フ先生何ノ樂ム所ゾト了介曰ク獨リ樂地ノ名教ニ在ル
ノミナラズ蘿月松風モ亦自ラ天心ヲ見ルト寛文九年酒

井推樂頭板倉内膳正二侯旨ヲ傳へ了介ヲシテ播州明石
ニ徙ラレム時ニ松平日向守明石ニ守タリ因テ太山寺ノ
傍ニ居ラレム弟子益進ム門人嘗テ問フテ曰ク夫子未ダ
嘗テ憂ヘザルカ何為レゾ窮ニ處スル申々如ナルヤ夫子
未ダ嘗テ懼レザルカ何為レゾ厄ニ遭フテ裕々如ナルヤ
ト了介曰ク是レアルカナ譬使仁者ニシテ必ず達セバ関
損仕ヲ汶上ニ辭セズ勇者ニシテ必ず遂ゲバ仲由纓ヲ臺
下ニ結バズ了介時ニ乗ズレバ千乗ノ賦ヲ理ム時否ナレ
ハ身ヲ一畝ノ宮ニ束カヌ否泰ハ運ナリ禍福ハ天ナリ夫
レ又何ヲカ憂ヘ何ヲカ懼レン吾ハ則チ以テ之ヲ天ノ寵
靈ト謂フ古人罪無クシテ月ヲ請居ニ弄スルヲ願フ者吾
適月ニ乘ジテ中庭ニ彷徨ス幽情遠概亦人界ニ似ズ富貴

ヲ藉テ世ニ薰灼スルハ心誠ニ罪アルヲ知ル豈ニ天ニ愧
ダサランヤ吾内ニ省ミテ疚シカラス人言何ゾ臨フルニ
足ランヤ今誤テ嫌諱ニ觸ルト雖凡世人マタ罪名ヲ定
メタルニ非ルナリ百年ノ後キ必ズ公論アラン唯是間居
無事絃歌講誦竊カニ先王ノ道ヲ樂ムデ老ノ將サニ至ラ
ントスルヲ知ラザルノミト延寶七年明石侯封ヲ大和ノ
郡山ニ移ス了介亦此ニ遷ル幾クモ無ク復封ヲ古河ニ移
ス水多下野守之ニ代ル了介ヲ待ツト松平日向守ノ時
ニ准ズ弟子遠方ヨリ至テ業ヲ受クル者多シ其名海内ニ
噴々外リ貞享四年將軍綱吉公ノ命ヲ以テ了介又古河ニ
徙ル松平日向守之ヲ待ツ愈厚シ其歲ノ十月封事ヲ幕府
ニ上ツリ政務ヲ更始スルヲ勸ム大ニ旨ニ忤ヒ古河ニ禁

錮セララル了介既ニ時ニ用井ラルヲ得ズ喟然トシテ歎
ジテ曰ク吾道行ハレズ何ヲ以テカ自ラ後世ニ見ハレン
ヤト乃チ大ニ志ヲ著述ニ專ラニス其學經濟ニ長ズ論ズ
ル所皆獨得ノ見ナリ
了介資性温良寛弘ニシテ家人奴婢ト雖凡相親ハ猶ホ骨
肉ハボトト菜羹鮭炙ト雖凡來テ飲食スル者各飽ヲ獲テ
去ル家法最モ儉素ニシテ妻子庶務ヲ幹旋ス隣糶借帷ハ
聞エ外ニ發ハレズ衣服飲食泊然トシテ營ムトナシ晩年
最モ音樂ヲ好ミ音律ヲ精覈シ雅樂解ヲ著シ之ヲ弟子ニ
授ク世知ル者或ハ布ナリ元禄四年ノ秋了介年七十三ニ
シテ歿ス其墓ニ展スル者今ニ至テ絶ヘズト云フ
了介年少ノ時體貌充肥セリ自ラ以為ク武人ハ職一旦緩

急甲ヲ被ハリ兵ヲ持シ馳驅奔走シテ為サハル所ナシ。而
シテ豊肥斯ハ如ク甚ダ之ヲ歎ムズ。稟受ニ由ルト雖亦
或ハ安佚ノ致ス所ナリト。是ヨリ苦ヲ攻メ淡ヲ食ヒ。日夜
武事是レ講ズ。或ハ曠野ニ出デ、鳥銃ヲ發シ。或ハ山村ニ
行テ民家ニ投ズ。其當直ニ當ルヤ、木兵ヲ裯笥ニ藏クシ。僚
友寢ニ就クノ後チ、獨リ竊カニ空庭ニ出テ槍劍ノ法ヲ演
ス。或ハ深夜屋ニ登リ火ヲ禦グヲ習フ。是ノ如クスル者十
餘年。身軀稍瘦削セリト。

櫻所子曰ク。惺窩以來。儒術ヲ以テ身ヲ立テ家ヲ興ス者多
ホカラズトセズ。而シテ士大夫ノ品行ヲ維持シ。三百年ノ
久キニ及ベル者。儒教ノ功多キニ居ルト云フモ。亦不可ナ
キナリ。而シテ其間儒士ニシテ自ラ一地方ノ政治ヲ與カ

リ聞キ。德澤ヲ其民ニ及ボセル者ハ。獨リ熊澤蕃山アルノ
ミ。蕃山ノ始メ學ニ志スヤ。朱註ニ依テ四書ヲ研鑽シ。其師
ヲ求メテ得ズ。偶京都ノ逆旅ニ於テ。中江藤樹ノ學識德行。
凡常ナラザルヲ聞キ。奮テ之ガ許ニ至ルヤ。廡下ニ卧ス。一
ニ夜其篤志。想フ可キナリ。而シテ業成テ後チ。富榮ニ處テ
驕ラズ。窮阨ニ居テ戚マズ。其胸襟ノ洒々落落タルヲ視ル
ニ足レリ。今世ノ人士。動モスレバ地位ニ隨テ其志嚮ヲ易
シ。朝夕ニ君權ヲ主張シ。夕べニ民權ヲ唱和スル如キ者ト。
固ヨリ日ヲ同フレテ談ズベキニ非ス。且夫レ今ノ學者論
士。間風俗ノ文弱ニ流ガル。ヲ慮カリ。且ツ身体ヲ勞動ス
ルハ。攝生ノ要訣ナルヲ以テ。或ハ擊劍ヲ學ブベシトイヒ。
體操ヲ忽セニスヘカラズトシ。經濟家ハ歐洲學士ノ言ニ

由テ池ヲ穿チ隄ヲ築キ、溝渠ヲ疏鑿シ、遭運ヲ便ニスルノ利ヲ説キ、或ハ森林ノ國ニ必用ナルヲ論ス、而シテ明政府ノ措置セラル、所モ亦森林ヲ蕃殖シ、漕運ヲ快利ニスル等ノ事ニ、深ク注目セラル、者ノ如シ、蕃山二百年ノ昔日ニ在テ、既ニ皆ナ之ヲ試ム、豈卓識ト謂ハザル可ケンヤ、獨リ此ノミナラズ、蕃山ハ一介ノ士ニシテ、既ニ備候ノ殊遇ヲ受ク、縉紳侯伯東脩ヲ行ヒ、道ヲ問フアリ、或ハ賓師ノ禮ヲ以テ之ヲ遇スルアリ、名門右族争テ之ヲ延クニ至ル、紀州侯頼宣ノ蕃山ヲ禮待スル、送迎必ズ門ニ及ブト云ス、其他貴顯ノ敬重スル所トナリシハ、推シテ知ルベキナリ、現今泰西ノ學ヲ唱ヒ、世人ガ泰斗視スルノ學士アリト雖、氏未ダ其德望此ノ如クナル人アルヲ聞カズ、思フニ蕃山文

化未ダ遍ネカラザルノ昔時ニ在テ、能ク斯クノ如キヲ致セル者、命世ノ才アルニ由ルト雖、氏抑モ亦其志ヲ持スル堅忍ニシテ、勉強刻苦實學ヲ磨礪シ、智識德望並ビ高キヲ以テニ非ズヤ、夫レ蕃山嘗テ道ヲ求ムルニ熱心ナル、廡下ニ卧スヲモ厭ハザルノ心ヲ以テ、心トシテ終始變ゼズ、故ニ其志ヲ得レバ、一藩ノ制度ヲ釐革シ、天下ノ人士ヲシテ、目ヲ屬セシムルノ功業ヲ建テ、其志ヲ失ヘバ子第ヲ教授シテ、心ヲ風月ニ娛マシメ、幽囚セララル、ニ至テ、生キテ其道ヲ行フニ由シ無キヲ知リ、專ラ著述ヲ事トシ、後世ヲ裨益セントス、嗚呼蕃山ノ如キハ、有爲ノ士ト謂フベキナリ、故ニ其出身ノ始メヨリ、歿後墓ニ展拜スル者、今ニ至テ絶ザルニ至ルマデ、一モ頑ヲ醒マシ、懦ヲ起ス事ニ非ルハ無

ク皆ナ以テ傳フベシト爲ス。故ニ煩ヲ憚ラスシテ前ニ具
載ス。冀クハ蕃山ノ風ヲ聞テ志ヲ立テ節ヲ勵マス人アウ
ニコヲ。

第六 岡崎秀民志ヲ隣家ノ弦聲ニ激勵セシ事

岡崎秀民ハ備前ノ藩士ニシテ慶安時代ノ人ナリ。暨ヲ以
テ同侯ニ仕フ。其隣家ニ住スル青池三之丞トイヘル士ハ
頗ル射術ニ勵精シ。公務ノ餘暇ニハ夙夜射籠ヲ射テ習鍊
スルヲ常トシ。晴雨ヲ問ハズ寒暑ヲ論セズ。遂ニ其技大ニ
進ミ善ク狂猪ノ眼ヲ射ル。或時藩侯ノ前ニ於テ五矢ヲ以
テ梅花ヲ的トシテ試シニ一矢ノ其莖ニ命中セザル無キ
ニ至ル。此ニ於テ侯深ク其技能ヲ感賞シ。猶ホ一矢ヲ以テ
中央ノ寸八的ヲ射セシム。三之丞命ニ應ジ矢ヲ注シテ發

スレバ後矢ハ前矢ノ括ヲ射テ鏃ニ及ベリト秀民ハ夜籬
ヲ隔テ隣家ノ弦聲ヲ聞キ以爲ク三之丞ハ寒暑風雨ヲ
論セズ日夜刻苦スル此ノ如ク思フニ我が業ノ如キ夏宵
ハ蚊帳ノ裡ニ在テ學フ可ク冬日ハ足ヲ火閣ニ投ジテ讀
ムベシ武人ガ弓馬ヲ習鍊スルニ比スレバ其難易愛カニ
殊ナリ然ルニ彼レハ其困難ナル弓術ヲ習修シ夜ヲ以テ
日ニ繼グ我レハ容易ニ爲シ得ベキ學業ヲスラ惰リテ光
陰ヲ徒消スルハ豈ニ深ク省察セザルベケンヤト爾後志
ヲ立テ朝夕ニハ仲景ノ書ヲ繙キ夕ニハ扁華ノ奧義ヲ
探リ弦聲ハ讀書ノ聲ニ和ス終ニ共ニ一層ハ精カヲ勵マ
シ相競テ倦ムトヲ知ラザルニ至リ秀民亦國手ノ名ヲ轟
カセリ故ニ當時備前ニ於テ技藝ニ鍊達セル者ヲ稱スル

必ズ先ヅ指ヲ青池ノ弓術岡崎ノ鑿學ニ屈セリト。
櫻所子曰ク人激スル所ナケレバ發奮勵精スルノ好機ヲ
得サルモノナリ秀民亦三之丞ト隣ヲ為スニ非ンバ恐ク
ハ庸墜ヲ以テ其身ヲ終ヘン隣ヲ擇ブ豈啻ニ子ヲ教ユル
ノミナランヤ然リト雖氏為スアルノ士ハ尋常庸人ノ敢
テ意ヲ經ザル所ニ於テモ猶ホ其志ヲ激勵スル者ナリ即
チ越前黃門ガ阿國ノ舞ヲ觀テ泣クノ類ナリ秀民ガ隣家
ノ弦聲ニ激セラレテ其業ニ進ミレガ如キ亦理ナル哉

第七 谷松三介勤苦志ヲ求メシ事

谷松三介一齋ト號ス土佐ノ人其父時中天性豪爽ニシテ
志節アリ最モ儒學ヲ喜ブ時喪亂ノ餘リ文化未ダ開ケズ
況ヤ僻郷最モ典籍ニ乏シ書ヲ四方一求メ多ク之ヲ儲ス

家産之ガ為メニ殆ンド蕩盡ス嘗テ三介ヲレニ小倉三省
ノ所ニ學バシム謂テ曰ク吾聞ク富貴ハ志ヲ失フト田産
五百石此レ子孫ヲ惠ム所以ニ非ルナリト乃チ之ヲ鬻ギ
僅カニ數頃ヲ以テロヲ餬スベキヲ存スト云フ三介土佐
ヲ去リ京師ニ移リ而シテ江戸ニ遊ビ稻葉侯ニ事フ暮年
之ヲ辭ス性淡泊ニシテ財貨ヲ屑トセズ且ツ其悟性中人
ニ逾エズト雖氏然カモ勤苦志ヲ求ム是ヲ以テ其學體用
アリト稱ス

櫻所子曰ク徂徠ハ當時名ヲ一世ニ擅ニシ文壇ニ於テ許
ス所鮮シ而シテ其護園隨筆ニ谷一齋先主ナル者アリ云
云ト謂フヲ以テスレバ以テ一齋ノ評ヲ定ムルニ足レリ
而シテ其人悟性中人ニ逾エズ勤苦志ヲ求メ以テ之ヲ得

タリトセバ世ノ學業ヲ成サントスル人其才無キヲ憂フルヲ勿レ其學資ニ乏レキヲ歎ズルヲ勿レ唯辛苦ヲ歷嘗スルヲ厭ハザルノ志未ダ立タザルヲ憂ヘヨ

第八 新井君美貧ニシテ志氣ヲ撓屈セザリシ事

新井君美白石ト號ス江戸ニ生ル其父ハ常陸ノ人ナリ年少フレテ江戸ニ到リ久留利侯ニ仕フ白石初メ父ニ從テ久留利ニ官ス年二十一ニシテ父ト共ニ仕ヲ辭ス是ニ於テ貧甚シ人或ハ之ニ勸ムルニ鑿ヲ業トシ若クバ字ヲ教ヘ以テ給ヲ取ルノ計ヲ以テス白石從ハズ一ニ意ヲ儒經ト史冊ニ刻ス時ニ河村瑞軒殷富ニシテ多ク書ヲ藏ス乃チ就テ借覽ス瑞軒心白石ノ凡ナラザルヲ知リ因テ其女ニ配シ納レテ以テ塔ト為サントス白石肯ンビズ後チ堀

田侯ニ遊事ス居ル十年志ヲ得ズシテ去ル時ニ貧亦甚シ篋中唯青錢三百文米三斗ハシ曰ク此レ未ダ過カニ凍餓セズト意氣少クモ撓マズ白石少フレテ大志アリ常ニ自ラ誦レテ曰ク大丈夫生テ封侯ヲ得ズンバ死シテ當サニ閻羅王ト為ルベシト遂ニ幕府ニ仕ヘ正徳辛卯韓使來聘セシ時使者ト禮法ヲ論シ竟ニ使者ヲシテ屈伏セシメシ等殊功多シ從五位下ニ叙シ筑後守ニ任ズ年六十九ニシテ卒ス古今著書ノ富白石ニ若クハナシ未ダ稿ノ脱セザル者ヲ併セテ凡ソ一百六十餘種ニ及ベリト云櫻所子曰ク我邦兵戈紛擾ノ日ヲ除クノ外ハ悶悶ヲ以テ官職ヲ世襲スルノ習俗タリシヲ以テ材能アリト雖氏仕進ノ路ヲ得ル太ク難シ白石右文ノ世ニ生シ寒門ニ長シ

封侯ヲ得ントスルノ望ニテ懷キ家ニ儉石無キモ其志氣
ヲ屈撓セズ遂ニ從五位下筑後守ニ叙任セラル、ニ至ル
今ヤ閥閥世襲ヲ廢シ人材ヲ登庸セラル、ノ隆時ニ遭フ
若シ今日ニシテ小成ニ安ンジ遠大ノ志ヲ立ルコトヲ爲サ
ズンバ將ク如何ナル時ヲ待テ志ヲ立テ發奮勉勵センヤ
第九 三宅正名同九十郎貧ニシテ苦學セシ事

三宅正名石菴ト號ス其弟九十郎觀瀾ト號ス京都ノ人ナ
リ兄弟共ニ少フシテ學ニ耽リ家道ヲ視ズ是ヲ以テ資産
遂ニ蕩盡ス乃チ家什ヲ斥賣シ以テ舊債ヲ償フ則チ餘ス
所僅カニ數金ノ心正名弟九十郎ニ謂テ曰ク今貧極ルト
雖氏短褐蔬食以テ數年ヲ支ユベシト鑽堅志愈厚ク壞
堵ノ室凡ニ對シテ講習レ共ニ寢食ヲ忘ル、ニ至ル幾久

モ無クシテ窮亦極マル是ニ於テ兄弟相携テ江戸ニ遊ヒ
教授シテ給ヲ取ル居ルコト數年正名京師ニ歸リ大坂ニ來
ル時名翹然トシテ起リ弟子雲集ス中井甕菴等相謀テ官
ニ請フテ庠校ヲ建テ懷德堂ト名ケ正名ヲ推レテ祭主ノ
事ヲ領セシム九十郎ハ黃門光國ノ召ニ應ジテ國史編修
總裁ト為リ後チ新井君美ノ薦メニ因テ幕府ニ仕フ兄弟
共ニ儒名朝野ニ嘖々タリシト云フ
櫻所子曰ク人ノ事業ヲ為ス必ズヤ其初メニ於テ若干ノ
資本ヲ投セザル可ラス而シテ世上遊蕩ニシテ家産ヲ蕩
盡シ家什ヲ鬻キ其甚キハ妻ヲ典シ兒ヲ弃ツルニ至ル者
ヲ視ル其學習ノ資本ノ為メニ資産ヲ傾ケ家什ヲ賣ルニ
至ルモ敢テ其志ヲ撓メザル者絶テ無クシテ僅カニ有ル

所ナリ宜ナル哉其業ヲ成スニ及ビ名聲ヲ朝野ニ施クニ至リシヲ世ノ花費ノ為ニハ十金ヲモ愛マズ書ヲ買ヒ師ニ謝スルニハ一金ヲモ吝ム輩ハ猶ホ資本金ヲ募ラズシテ一大會社ヲ起サントスルガ如シ生涯碌々トシテ人後ニ立ガルヲ欲スト雖モ豈得ベケンヤ

第十 物徠遠志ヲ抱キ一代ノ儒宗タリシ事

徠又護園ト號ス姓ハ荻生氏小字ハ惣右衛門江戸ノ人其父方菴鑿ヲ以テ幕府ニ仕テ延寶中事ニ坐シテ上總ニ流竄セラル。徠父ニ從テ共ニ往ク居ルヲ十三年其親ハ所ハ田夫野老其處ル所ハ蚤ハ蝻煙既ニ書籍ニ乏シク又師友無シ篋中僅カニ大學諺解一本アルハ心ニ徠此ニ因テ研究ス其警敏不群ナル幼ヨリ即チ遠志アリ是ヲ以テ

赦ニ値フテ江戸ニ還ルコト業殆ンド大成ス初メ芝街ニト居ス時ニ貧居洗フガ如シ舌耕殆ンド衣食ニ給セズ増上寺ハ前ニ藜祁ヲ賣ル家アリ徠ガ貧ニシテ志アルヲ憐レシ日ニ雪花菜ヲ饋ル後チ禄ヲ食ムニ至リ月ニ米三斗ヲ贈リ以テ之ヲ報ズ徠柳澤氏ノ侯ニ封セラ、ルニ及ビ召サレテ書記ト為ル然レ氏祿尚ホ微ナリ尋テ柳澤侯累リニ封ヲ益ス徠亦侯ノ寵遇ヲ以テ累リニ其秩ヲ益シ五百石ニ至ル徠ノ儒學ハ槩然トシテ一家ノ見ヲ立テ先儒ノ作ス所ハ一切之ヲ排ス其豪邁卓識雄文宏詞一世ヲ籠絡ス終ニ海内仰テ此邦未曾有ノ人ト爲スニ至レリ又少時兵學ヲ精修シ其仕途ニ就ク亦兵學ヲ以テシ儒ヲ以テセス或時大岡越前守忠相曰ク聞ク徠博識冷

聞知ラザル所ナシト。余將サニ試ミニ問テ以テ躡カシメ
ントスト。乃チ招イテ問テ曰ク。世ニ鼠婚ノ説アリ。何ノ謂
グヤ。徂徠答テ曰ク。事某年某人ノ著スル所ノ一小説ニ出
ルナリ。乃チ其書載スル所ノ鼠類ノ眷屬名姓。口ヲ衝テ縷々
注ダガ如シ。忠相始メテ其疆記ニ服ス。其疆記亦斯類ナリ。
徂徠書ヲ看テ暮ニ向ヘバ。則チ出デ、檐隙一就キ。檐隙亦
字ヲ辨ズ可カザルニ至レバ。則チ入テ齋中ノ燈火ニ對
ス。故ニ且ヨリ深夜ニ及ブマデ手卷ヲ釋クノ時無シ。其平
素分寸ノ光陰ヲ惜ム率ネ此類ナリ。服南郭某歳ノ元日徂
徠ヲ訪フ。徂徠方ニ几ニ隱ツテ孫子ヲ閱ス。面垢洗ハズ。髮
亂レテ梳ラズ。新年ヲ知ラザル者ハ若シ。乃チ鹽々トシテ
兵ヲ談ジテ置カズ。南郭竟ニ新禧ヲ祝スルヲ得ズシテ去
レリト云フ。

櫻所子曰ク。徳川氏ノ霸府ヲ江戸ニ開キレヨリ。昇平三百
年。其間鴻匠瑣儒多シト。雖氏其道德ニ於テハ。則チ藤樹仁
齋其博學洽聞ニ於テハ。則チ徂徠物氏ヲ推ス。後チノ學者。
激昂奮勵スレ氏。竟ニ及ブ能ハズ。徂徠ノ學。其瑜瑕得失ハ。
則チ猶ホ免ヌガレズト。雖氏亦不世出ノ豪傑ト謂ハザル
可ケンヤ。然ルニ藤樹仁齋。徂徠ノ三大家。共ニ師友無クシ
テ書籍ニ乏シク。加フルニ其家貧窶ナルヲ以テスルモ。屹
然不撓ノ志ヲ懷キ。分寸ノ光陰ヲ惜ミ。耐忍勉強ヲモツテ。
遂ニ旗幟ヲ文壇ニ樹テ。一世ノ泰斗ナルノミナラズ。後世
ノ學者ヲ風靡スルニ至ル。中ニ就テ徂徠ノ如キハ。其書ニ
乏キ。大學諺解一本ニ止ル。其家ノ貧キ。雪花菜ヲ食テ飢ヲ

支フルニ及ビシニ非ズヤ、今ノ青年輩、動モスレバ學資ニ
乏キヲ訴ヘ、書籍ヲ闕クヲ歎ジ、良師無キヲ慨スル者、至竟
已レガ怠惰ニシテ、安佚ヲ貪ボルノ非ヲ掩フノ口實ノミ
若シ然ラズト謂ハ、前ノ三大家ガ、學業ヲ大成セシ傳紀
ヲ視ヨ。

第十一

雨森芳洲年八十一始メテ和歌ヲ學ビシ事

雨森芳洲字ハ伯陽、小字ハ東五郎、京都ノノナリ、年十七八、
江戸ニ遊ビ、木下順菴ニ從學シ、業大ニ進ム、順菴稱シテ後
進ノ領袖ト為ス、遂ニ其薦メニ因テ、對馬侯ニ筮仕シ、文教
ヲ掌トリ、韓人ニ接待シ、名聲海ノ内外ニ馳ス、芳洲ノ韓語
ニ通ズルヲ以テ、韓人ト相說話スル、譯者ヲ假ラズ、韓人戲
レテ曰ク、君善ク諸邦ノ音ヲ操ス、而レテ殊ニ日本ニ熟ス

ト、芳洲年八十ニシテ、始メテ倭歌ヲ學ブ、其意ヲ謂ラク、
詩ハ則チ時アリ、之ヲ作ル、稱ス可キ者無シト、雖氏平仄ハ
謬テ、サルヲ得、國風ニ至テハ、一ニ其法ヲ解セズ、先ヅ、古歌
ヲ熟讀スルニ如クハナシ、今ヨリ、古今集ヲ讀ム者、一千遍
而シテ、後チ自ラ賦スル者、一萬首、其レ或ハ少ク通ズル所
アラント、乃チ二年ニシテ、千遍畢ル、又三年ニシテ、萬首就
ル、梁田銳巖曰ク、伯陽予ニ語テ曰ク、玉露凋傷、楓樹林、美ハ
則チ美ナリ、我が猿太夫ノ紅葉鹿鳴、人ヲシテ感ジ易カラ
シムルノ愈ルト為スニ、如カザルナリト、伯陽華音ニ善シ、
綜博ニシテ、藻林アリ、其品茂、郷ノ下ニ出デズシテ、其言此
ノ如シ、知言ト謂フ可キ者ナル哉ト、

櫻所子曰、久我邦ノ三十一言周代ノ三百篇、其他佛經ノ偈

頌、舊約全書ノ詩篇、及び回教火教ノ神ヲ禮拜スル唱歌等、
世界各邦、皆古來此種ノ者アリ、而レテ其人ヲ感動スルハ、
必ズ其國人ノ耳目ニ慣熟セル者ヲ以テ最モ深シトス、且
ツ昔時戰亂ノ日ト雖、將士ノ心ヲ國風ニ傾クル者多シ
中ニ就テ義家ノ物來關ノ咏、及び貞任ノ年を經、絲の糸、
水の悲、小さじトノ句ヲ以テ、義家ノ衣のたて、ハほこるび
にけりト云ヒカケレニ應ジタルガ如キ、宗任ノ梅花ヲ問
ハレテ、直チニ國風ヲ以テ答ヘシガ如キノ類、枚舉ニ遑ア
ラズ、太田持資ガ遠ク、近ク、なるみの濱、千鳥鳴音に潮
の満干をぞしるト云フニ由テ、潮汐ヲ知り、底ひるき淵や、
ハ騷ぐ山川の浅き、瀬ふこそあだ波ハたてト云フニ由テ、
利根川ヲ涉り、板倉周防守ノ、鷲の尾の山此奥ふも人ぞむ

む佛法僧の鳴につまでもト云フニ由テ、山賊ヲ捕ヘシガ
如キ、國風ニ由テ、或ハ用ヲ軍陣ニ爲シ、或ハ賊ヲ拿捕スル
ノ助ケトナル、是所謂不龜手ノ藥モ、之ヲ大用スレバ、封侯
ヲ得タルガ如ク、一時ノ吟詠ニ出シ者モ、亦用ヲ為スヲア
リ、世ノ洋學者流、動モスレバ、和歌ヲ以テ、昔時公家ノ玩弄
物ノ如ク言做スハ、太ダ謬レリト謂フベシ、且ツ夫レ洋ノ
東西ニ論無ク、其言異ナリト雖、凡、性情ノ感ヲ述ブルハ、則
チ同ジ、聞ク、昔シ唐ノ僧皎然トイヘル者アリ、韋蘓州ノ詩
風ヲ擬シ、其悦ビヲ得ント欲シ、數首ヲ示ス、韋蘓州賞セズ、
因テ舊作ヲ示ス、韋蘓州大ニ賞歎シテ、凡ソ詩ハ各自ノ得
所アリ、強テ人ヲ學ビ、其心ヲ悦バシメントスレバ、本色ヲ
失テ精巧ナラズト誠ノシト云、况ヤ日本人ニシテ唐宋ノ

詩ヲ學ブハ、徒ニ歩ヲ學ビ聲ニ倣フモノ、ミナルヲヤ、何
ゾ心情ヲ盡シテ、遺憾ナキヲ得ンヤ、既ニ自ラ其心情ヲ盡
ス、充分ナラザル、何ゾ能ク人ヲ感動スルニ足ランヤ、芳洲
茲ニ見ルアリ、尋常腐儒ノ僻見ヲ打破ス、卓識ト謂フベキ
ナリ、而シテ齡既ニ八旬ヲ過ギ、古今集ヲ讀ム千遍、自ラ賦
スル萬首、五年ニシテ其功ヲ畢ハル、篤志ト謂フベキナリ、
世ノ齡未ダ知命ニ至ラス、而シテ近體ノ詩數百首ヲ作ル
ニ過ギズ、解ス可カラザルノ句ヲ綴リ、騷人韻士ヲ以テ自
負スルノ徒、反省スル所ヲ知レ、

第十二 太宰純菅麟嶼ヲ規セシ文

太宰純、小字ハ彌右衛門、春臺ト號ス、信濃ノ人ナリ、徂徠ノ
門ニ於テ、名聲一時ニ冠絶ス、其人トナリ、嚴毅方正ニシテ

才氣風
骨費ニ對スルモ、言思憚無レ、菅麟嶼ト云フ者アリ、才氣風
發、年十三ニシテ擢テラレテ幕府ノ儒官ニ列ス、一時稱シ
テ奇童子ト為ス、然ルニ卒ニ苗ニシテ秀テズ、春臺之ヲ規
碁シテ少クモ借サズ、其忠誠激切ナル、亦以テ幼ニシテ才
氣アルモノ、規箴トスルニ足ルヲ以テ、其書ヲ譯シテ左
ニ撮録ス、

純足下ノ學ニ於ケルヲ觀ルニ、王公大人ノ學ヲ以テ戲
ト爲シ、以テ日ヲ消スル者ノ如クナル、無キヲ得ンヤ、
夫レ足下ハ布衣ニ非ズト雖、然カレ氏儒生ナリ、不幸
ニシテ早ク神童ヲ以テ聞ユ、幸ニ國恩ヲ蒙リ、廩粟ヲ賜
ハリ、文學ニ列シ、朝請ヲ奉ズ、少シト雖、氏以テ務ムル所
ヲ知ラザル可カラズ、古人童穉ニシテ、日ニ六藝古文數

予言ヲ誦スル者アリ。純足下ヲ識ルヨリ以來、茲ニ數年、未ダ足下ノ誦スル所アルヲ聞カズ。今日ヲ以テ、前年ニ較バルニ、亦未ダ其進ム所アルヲ見ズ。而シテ進ム所ノ者ハ、吹笛ノミ、近來聲價頗ル減ズ。豈ニ徒然ナランヤ。程正叔言フアリ曰ク、人三不幸アリ、少年ニシテ高科ニ登ル、一ノ不幸ナリト、足下其レ諸レヲ思ヘ。又曰ク、吾子冬ハ則チ霜雪ヲ畏レ、夏ハ則チ雷ヲ畏ル、一歳ノ内、雷ト霜雪トヲ避クレバ、則チ其畏レ無キ者幾シド稀ナリ。古語ニ所謂、首ヲ畏レ、尾ヲ畏ル、身其餘リ幾クゾト、吾子之ニ近シ、純聞ク、西域ニ無雷ノ國アリ、南方ニ八蠶ノ地アリト、吾子乃チ彼ニ生ゼズレテ、此ニ生ル、何ゾ造物ノ吾子ニ利ナラザルヤ。予ハ則チ以為ク、吾子ハ患稟受ハ薄キ

山ハト雖、此亦豈ニ奉養太ダ厚ク安佚度ニ過クルヲ以テ自ラ其疾ヒヲ崇ムルニ非ズヤ。吾子少ナリト雖、此幸ニ一タビ諸ヲ思ヘ。

櫻所子曰ク、世ニ奇童ト稱セラル、モ長ジテ後チハ平凡尋常所謂苗ニシテ秀デザル者、少クナトセズ。是他無シ、其一科ヲ卒ヘ一書ヲ誦スルモ、隣里郷黨ノ稱譽スル所トナルヲ以テ、早ク既ニ驕慢ノ心ヲ生ジ、志氣自カラ挫ケテ、亦勉強耐忍積ムニ歳月ヲ以テスル能ハザルニ由ル。且ツ夫レ驕心ハ、人世百般ノ事業ヲシテ、軟弱萎靡ナラシムルノ鳩毒ナリ。况ヤ幼齡ニシテ驕心ヲ生ズルキハ、其精神懶惰ニシテ活潑ナラズ、安佚ヲ好ムデ勤苦ヲ欲セス。終身ノ景狀ハ、宛カモ阿芙蓉煙ヲ喫スル者ト、相匹似スルニ至ラン。

豈其業ノ大成ヲ望ムベケンヤ。太宰春臺ガ、菅麟嶼ニ忠告
スル所ノ如キハ、世ノ才氣アル少年ガ頂門ノ鍼夜ニシテ、
亦其苦學ノ志ヲ培養スルノ肥料ニ供スベキナリ。

第十三、吉益東洞貧窶ニシテ、毫モ志ヲ折カガリシ事
吉益東洞本姓ハ畠山氏、安藝ノ人ナリ。東洞少フシテ志氣
アリ、以為ク我が遠祖政長ハ管領タリ、我天下ノ名族トシ
テ、豈再ビ家ヲ興ガハル可クニヤト。恆ニ兵法ヲ學ビ、馬ヲ
馳セ、劔ヲ試ム、年已ニ長ズルニ及ビ、自ラ以為ク太平ノ世
武術ニ長ゼシトイフ氏、亦其伎倆ヲ試ムル日無シト、是ニ
於テ慨然トシテ誓テ曰ク、大丈夫良相トナラズンバ、當サ
ニ良醫トナルベシト。遂ニ醫術ニ心ヲ潜ム、黽勉スルノ歳
アリ、日夜怠ラズ、業成テ後手邊僻ハ地ニ在ル、疾ヲ救フノ

功多カラズ、業ヲ授クル弘カラズ、京都ニ移任セシニ若カ
ズト、元文三年、家ヲ携ヘテ京洛ニ移リ、專ラ仲景ノ治方ヲ
唱フ。東洞京都ニ在リテ、其業未ダ盛リニ行ハレズ、門生進
ムヲ無シ、偶^ズ偷兒ノ貨ヲ掠メ去ルニ遭ヒ、家更ニ貧シ、其友
村尾某、仕途ニ就カンコトヲ勸ム。東洞可カズシテ曰ク、初
メ我レ子ヲモツテ知己ナリトス、今ニシテ後子子ハ我レ
ヲ知ルモノニ非ルヲ知ル、我レ貧ニシテ且ツ老親アリト
雖氏、何ゾ志ヲ降シテ、祿ノ為メニ仕ワルモノナランヤ、貧
ハ士ノ常ニシテ、窮通ハ命ナリ、假令我術行ハレズト、雖氏、
天豈ニ斯道ヲ喪ホサシヤト、而シテ家益貧ク、饑餓マサニ
且夕ニ迫ル、東洞晏然トシテ憂戚セズ、一日其舊識ナル賈
翁アリ、東洞カ貧ヲ憐シ、金若干ヲ與フ、東洞毅然トシテ曰

久我レ故無クシテ金ヲ受クベキニ非ズ。又之ヲ受クルモ
報ユルノ日無シ。賈翁之ヲ強テ曰ク、吾何ゾ憤ヒヲ求ムル
者ナランヤ。且ツ先生ヲシテ凍餓ニ陥ラザラシメントス
ル者ハ、世人ノ生命ヲ救濟セシガ為メナリト。東洞其言ニ
感ジテ之ヲ納レ、漸飢寒ヲ支フルコトヲ得タリ。幾クモ無
クシテ一人ノ病者ヲ診シ、藥劑ヲ投ゼシニ、山服東洋其席
ニ在リ。大ニ其主方ハ的當ナルヲ賞歎ス。病者モ亦日アラ
ズシテ愈ユ。東洞亦東洋ノ尋常ナラザルヲ知り、厚ク之ト
交ハル。東洞ノ名之ヨリ世ニ顯著ス。年五十ニシテ、類聚方
藥徵方極ヲ撰ミ、專ラ古方鑿ノ規律ヲ立ツ。晚年ニ及ビ、中
津侯祿五百石ヲ以テ召スト。雖氏應セズ、而シテ世人或ハ
其術ヲ信シ、或ハ之ヲ疑フ者アレ氏亦聊カモ意トセズ。安

永二年七十二ニシテ歿ス。バテハ、
櫻所子曰久東洞ハ管領畠山氏ノ裔ニシテ、即チ名族タル
リ。奮然トシテ志ヲ起シ、太平ノ世武術ヲ施スニ所無
キヲ觀テ、刀圭ノ業ヲ以テ當時ニ鳴ラントス。而シテ治ヲ
乞ヒ業ヲ問フ者稀ニシテ、檐頭蛛網ヲ張り、金底塵ヲ堆ス
ルニ至ルモ、敢テ初志ヲ屈撓セズ。遂ニ其名遠邇ニ喧傳シ、
重祿ヲ以テ招聘セラレ、ニ至ルモ亦敢テ利祿ノ爲メニ
節ヲ枉ゲズ。其誓フ所ニ背ムカズ。亦名族タルニ羞ヂズト
謂フベシ。夫レ始メアルコトアリ、能ク終アルコト少キハ、社會
ノ通患ナリ。其志操ヲ持スル、東洞ノ如クナランニハ終リ
アルニ庶幾キカ。

第十四 杉山某明ヲ失シテ鑿ニ志シタル事

杉山某ハ遠江國濱松ノ人ナリ。十歳ニシテ明ヲ失フ。幼キヨリ天資豪爽ニシテ名ヲ天下ニ成サント欲スルノ志アリ。然レ氏既ニ明ヲ失テ業トスベキ無シ。意ヲ醫術ニ決ス。甫八歳ニ至リ。鍼鑿トナリ。江戸ニ赴キ。日夜其技ヲ研精ス。年ヲ累ネテ終ニ妙解ヲ得其名大ニ發シ。四方治ヲ乞フ者鱗至。雜還シ。蔚トシテ鉅工トナル。公侯大人招請虚日無シ。將軍綱吉公之ヲ聞キ召テ左右ニ侍セシム。一日公問フテ曰ク。汝チモ亦欲スル所アリヤ否ヤ。對テ曰ク有リ。臣一眼ヲ得ント欲スト。左右大ニ笑ス。公曰ク是レ戲言ト雖氏真ニ憫ム可キナリ。乃チ宅地方一町ヲ本所第一橋ハ側ニ賜フ。蓋シ俗此橋ヲ呼ビ一目ト為スヲ以テノ故ニ此命アルナリ。因テ祿スルニ五百石ヲ以テシ。檢校職ニ任ズ。又地ヲ京

師ニ賜ヒ清聚菴ヲ置キ以テ天下警者ノ事ヲ總ベシム。其專ラ救濟ヲ好ム。初メ貧キ時尚ホ囊橐ヲ傾ケ以テ貧人ノ瞻ス。家道已ニ饒カナルニ及ビ賑恤スル所極メテ多ク。藪人ノ窮乏ナル者ニ於テ最モ厚キヲ加フ。元祿七年ヲ以テ江戸ニ歿ス。京都江戸ノ警者流某ハ德ヲ仰ギ其像ヲ作テ之ヲ敬禮スルニ至レリト云フ。

櫻所子曰ク杉山某十歳ニシテ明ヲ失フ。猶ホ能ク其志ヲ勵マシテ一技ヲ究ム。其身ヲ立テ家ヲ興ス。此ノ如シ。兩眼明カニシテ秋毫ノ末ヲ察ルニ足ル者ニシテ我レ能ク車業ヲ爲スニ足ラズトスル者ハ自暴自棄スルニ非ズシテ何ゾヤ。

第十五 谷玄圃明ヲ失シテ後チ詩學ニ志セシ事

谷玄圃ハ江戸ノ人ニシテ、彌江ノ子ナリ六歳ニシテ痘ヲ病ム、彌ヲ失ス八歳ニシテ醫術ヲ學ビ、常ニ指ヲ以テ字ヲ掌上ニ畫シ、書傳ヲ記臆シ、日ニ萬言ヲ誦シ、十四五歳ニシテ其技粗通ズ、十七歳ノ時、服南郭ガ李攀龍ハ唐詩選ヲ講説スルヲ聞キ、詩ヲ以テ醫術ニ換ヘ、唐明諸家ノ詩ヲ講ゼントス、人ヲシテ之ヲ讀マシメ、一タビ聽テ即チ記シ、年ヲ經テ忘レズ、諸學生ノ解スル能ハザル所通曉尤モ敏ナリ、後チ高蘭亭ニ從テ學ブ、而後昭明ガ文選、楊士弘ガ唐音、高廷禮ガ唐詩品彙、止聲、李攀龍ガ古今詩刪、李杜ハ全集ハ類皆能ク之ヲ暗記ス、事ハ策シ古ヲ談ル、殆ンド老博士ハ如シ、人神仙ヲ以テ之ヲ目スルニ至ル、初メ高蘭亭ノ詩ヲ以テ江戸ニ興ルヤ、服南郭ト並ンテ海内ヲ旗鼓シ、一時

ヲ風靡ス、聲稱縉紳ノ間ニ藉甚タリ、蓋シニ家法ヲ唐明ニ誦シ、意ヲ李王ニ刻シ、格調整合、紀律森嚴ナルヲ以テナリ、蘭亭歿シテ後チ、其門人皆玄圃ニ從フ、南郭特ニ耆壽ニシテ世ニ存シ、其赤羽橋ニ居ルヲ以テ、人々之ヲ赤羽ト稱シ、玄圃ハ萱葉坊ニ居ルヲ以テ、人々之ヲ萱洲ト稱ス、公卿大夫ヨリ以テ青衿子弟ト、縹流黃冠トニ至ルマデ、苟クモ詩ヲ學バント欲スル者、刺ヲ其門ニ修セザルハナシ、南郭歿シテ後チ、玄圃特ニ蘭亭ノ高弟ナルヲ以テ、詞壇ニ牛耳ヲ執レリ、玄圃既ニ詞藻ヲ以テ關東ニ睥睨シ、聲價一世ニ高シト雖、氏謙讓シテ常ニ謂ラク、予ガ性聲音ニ拙ク、針按ニ拙ク、明ヲ失スルノ後チ、其學習スル所百事通ズル所無シ、惟詞藻ハ、他技ニ比スレバ、敢々トシテ線路ハ明カナルアル

ハミト其歿スルノ後チ門人遺稿ヲ編輯シテ六卷ト爲シ
藍水遺草ト曰フ
櫻所子曰ク聞ク玄圃常ニ人ニ謂テ曰ク諸君醜タル面目
アリ然ルニ不慧ナルト斯クハ如シ五官果シテ何ハ用ヲ
カ之レ爲サント玄圃ハ六歳ニシテ明ヲ失シ其鑿ヲ學ビ
詩ヲ學ブ遂ニ蘭亭南郭ニ次デ詞壇ノ元帥タルニ至ル實
ニ我輩兩目炯然タル者ヲシテ愧慙ニ堪ヘザラシム然リ
ト雖氏一瞽者ニシテ樹立スル所アル猶ホ此ノ如シ五官
四肢缺カル所無キ者終身碌々トシテ名ヲ成ス所無クン
バ豈ニ獨リ心ニ愧ナザラニヤ苟モ之ヲ愧ヅル片ハ速カ
ニ奮勵シテ其志ヲ興起シ玄圃ヲシテ笑ヲ泉下ニ忍バシ
ムルコト勿カシ

第十六 佐久間彦四郎年廿六ニシテ學ニ志セシ事
佐久間彦四郎洞巖ト號ス奥州ノ人仙臺侯ニ仕フ幼ニシ
テ聰慧其父親重京都ニ祇役ス洞巖母兄ト家ニ在リ書ヲ
兄ニ學ビ日夜勤習ス十歳ニ及ブコロ數其兄ニ代リ簡牘
ヲ書シ父ノ許ニ贈致ス屬辭此事人ノ指揮ヲ煩ハサス老
成ノ手ヨリ出ルガ如シ洞巖十四五歳ニシテ頗ル繪事ヲ
好ム而シテ師友無シ畫本ヲ臨摸ス好ムテ山水ヲ畫ク嘗
テ僧雪舟ガ江湖ノ圖ヲ觀テ運筆ノ法ヲ悟ル是ヨリ以降
畫ク所尤モ風致アリ時ニ佐久間友徳ト云フ者アリ又畫
ニ巧ミナリ仙臺侯ノ為メニ寵遇セラレ擢デラレテ畫所
ト爲ル嘗テ洞巖ガ畫ク所ヲ觀以テ甚ダ奇ナリト爲シ苦
シ口ニ親重ニ乞フテ之ヲ養子トシ其業ヲ繼ガシム時ニ

年十七遂ニ祿百五十石ヲ獲フ。洞巖妙年ニシテ書ヲ善クシ。又書ヲ善クス。然カレ氏學問ノ業ニ至テハ未ダ嘗テ之ヲ學バズ。歳三十六ノ時人ノ為メニ二喬カ案ニ據テ書ヲ讀ム。圖ヲ畫ガク。其人ニ喬ノ事ヲ問フ。洞巖喬カ何人ノ婦タルヲ知ラス。大ニ之ヲ慙ヂ。遂ニ遊佐次郎左衛門ニ從テ學ブ。經義ヲ講習シ。博ク歴史ヲ究ム。遂ニ儒術ヲ以テ奥羽ノ間ニ顯著ス。仙臺府ノ專ラ朱子學ヲ尊信セシハ洞巖ヲ以テ嚆矢ト爲ス。洞巖亦詩歌ニ巧ニシテ新井白石ト情交尤モ密ナリシト云フ。

櫻所子曰久。洞巖妙齡ニシテ繪事ヲ好ミ。師友無クシ。造詣スル所アル者。豈精鍊深究ニ由テ得タル者ニ非ズヤ。其年知命ニ近キニ及ビ。初メテ學ニ志シ。遂ニ儒ヲ以テ奥羽ニ顯ハル。ニ至ル。是豈小成ニ安スル者ノ能ク爲ス所ナラシヤ。

第十七 小川信成勸學文ヲ臨摸シテ學ニ志セシ事

信成泰山ト號ス。江戸ノ人ナリ。幼ニシニ戲遊スル常ニ筆硯ヲ愛ス。苟モ寸帛尺紙ニ遇ヘバ意ニ隨テ科斗蚯蚓字ニ似テ畫ニ依タルノ狀ヲ作ス。五六歳ニ至リ。頗ル字體ヲ辨ズ。安永中松山敬和ト云者アリ。善書ヲ以テ聞ユ。嘗テ泰山ヲ見歎ジテ曰ク。斯兒凡ニ非ズ。且ツ書才アリト。迺チ為メニ司馬溫公ガ勸學ノ文ヲ書シテ之ヲ與フ。泰山臨摸シ。且ツ誦シテ怠ラス。漸ク文意ヲ解シ。讀書ノ人ニ益アルヲ知リ。初メテ學ニ志アリ。時ニ年僅ニ七歳ナリ。父之ヲ喜ビ。業ヲ其親ニ善キ所ノ山本北山ニ受ケシム。北山授タルニ太

史公ハ文ヲ以テス泰山受ケテ之ヲ讀ミ項羽ガ書ハ以テ
姓名ヲ記スルニ足ルノミ言ニ感ズル所アリ是レヨリ
復タ臨池ヲ事トセズ意ヲ決シテ書ヲ讀ム其一夕ビ謁ヲ
北山ニ執リシヨリ烈風大雨ト雖氏未ダ嘗テ師家ノ闕ヲ
踏マズンバアテズ曾テ大ニ墜フル一巨笠ヲ戴イテ之ニ
赴ク途未ダ半バニ至ラズ雪積リ笠重クシテ力之ニ勝ユ
ル能ハズ顛蹶シテ大ニ膝ヲ傷ツク人怒ムテ之ヲ扶ケ勸
メテ家ニ歸ラシムレ氏肯ンゼズ遂ニ師ハ許ニ至リ痛ヲ
忍ビ業ヲ受クルト常ノ如シ比隣傳ヘテ美談ト為ス泰山
稍長ズルニ及ビ嶄然トシテ頭角ヲ見ハス人ノ未ダ讀ム
能ハザルノ書ヲ讀ミ聞幽ヲ發伏シ微旨ヲ推闡セント欲
スルヤ其坐傍常ニ老。莊。晏。管。墨。列。呂。商。國。策。等ノ書ヲ置キ

巡覽シテ之ヲ讀ム衍文錯簡估屈聲牙讀ミ難キニ遇フ毎
ニ之ヲ校究シテ其說ヲ解了セザレバ則チ措カズ秋玉山
ガ校定スル所ノ墨子全書ハ經說數篇ニ至テ之ガ句讀ヲ
下ダス能ハズ其訓讀ヲ闕ク泰山發憤シテ之ヲ讀ミ索隱
攻微前後ヲ貫串シ墨子考六卷ヲ著シ竟ニ墨子全書ヲシ
テ展卷瞭然タラシム當時諸儒皆其墨子ニ大功勞アルヲ
稱ス天明五年泰山勞瘁ヲ病ムテ歿ス時ニ年僅ニ十七病
革ルニ至リ手未ダ卷ヲ釋カズ筆硯書帙枕邊ニ狼藉タリ
シト云フ

櫻所子曰久太田錦城泰山ガ著スル所ノ經子遺說ニ序シ
テ曰ク若シ此人ヲシテ今日ニ存在セシムバ一代ノ儒宗
當サニ此子ヲ推スベシト斯言溢言ニ非ルナリ(錦城ハ

泰山ヨリ長ズル一五歳ニシテ、同ク北山ノ奚疑塾ニ在リ
シト云フ。泰山初メ勸學ノ文ヲ臨摸シ且ツ誦シテ學ニ
志シ、太史公ノ文ヲ讀ムデ感悟スル所アリ、臨池ヲ事トセ
ズ、烈風大雨ト雖、敢テ師家ニ至ラズシテ、休止スルコトヲ
為サズ、顛蹶膝ヲ傷クルモ、痛ヲ忍ムデ業ヲ受クルニ至ル、
七歳ノ幼童ニシテ、其耐忍強勉ノ氣力ハ、夏カニ壯年血氣
ノ人ニ勝サルコト遠シ、故ニ其書ヲ讀ムヤ、人ノ未ダ讀ム能
ハザルノ書ヲ擇ムデ之ヲ讀ミ、古賢ノ道ヲ明カニシテ、以
テ後世ヲ裨ケント欲シテ、之ガ解説ヲ作クル、其刻苦勵精
大患ノ其身ニ在ル、手卷ヲ釋カザルニ至ル、其世ニ益スル
ノ志、深切ナリト謂ツベシ、若シ泰山ヲシテ、歐洲ニ生レシ
メバ、波斯ノ古代ニ行ハレタル、鏃形ノ文字ヲ讀ミ、東洋ノ

學ヲ一變セシ偉功ヲ以テ、獨リアンケテ、ルチユベロンニ
擯ニセシメザリシナラン、今ノ洋學者中、動モスレバ翻譯
ノ價ヲ求ムルニ急ナルガ為メニ、原文ノ艱澁ニシテ、容易
ニ了解シ難キ所アレバ、之ヲ脱除シ、常ニ好ムデ文章ノ平
夷ナル者ヲ擇ムデ、之ヲ抄譯スルガ如キニ比スレバ、大ニ
逕庭アリ、歐洲ノ學ヲ鍊修スルノ徒、奮興勵精、能ク泰山ノ
遺蹤ヲ追ヒ、世人ノ未ダ譯スル能ハザル書籍ヲ擇ムデ、之
ヲ譯述シ、幽ヲ發シ、微ヲ闡カバ、以テ世ヲ益スル大ナラン、
是我ガ熱望スル所ナリ、
第十八 山中猶平告ゲズシテ、素梓ヲ離レシ事
山中猶平、天水ト號ス、伊勢ノ農夫ナリ、少フシテ學ヲ好ム、
産業ニ柄カシテ、意ヲ經史ニ專ラニスル能ハズ、因テ京都

遊學セシヲ謀カル其父許サズ遂ニ告ケズ以テ奔テ
京ニ之キ偏ネク諸儒ノ間ニ遊ズ一モ其意ニ足充スル者
無シ遊未ダ甚ダ久シカウズシテ囊橐都テ盡ク窮苦得テ
言フ可カラザルナリ然リト雖氏未ダ嘗テ少クモ初志ヲ
折カズ學問益勉ム又江戸ニ至ル浪落萬狀傭書シテ衣食
ヲ給ス其窮先キヨリモ甚シ以テ憂ヒトセズ博ク諸名士
ニ交ハル又其意ニ充足スル者ナシ嘗テ山本北山ヲ暨官
某氏ノ家ニ見テ經義ヲ論辯ス大ニ喜ビ以テ宿望ヲ得タ
リト為人質ヲ其門ニ執ル時二年二十三北山ハ二十九ナ
リ是時北山業未ダ盛ナラズ奴僕ヲ買フテ給使ニ當ツル
ヲ能ハズ北山躬自ラ竈ニ當タリ天水ハ同塾ノ東方旗山
ト共ニ水ヲ擔ヒ薪ヲ伐リ其勞ニ服事ス幾クモ無クシテ

才俊ノ士門下ニ輻湊シテ而シテ業一時ニ盛昌ナリ天水
能ク之ヲ獎成スル尤モ多シ天水尤モ心ヲ文章ニ留ム思
ヲ構シ草ヲ起シ名物ヲ狀貌シ其微巧ヲ施ス俄頃ニシテ
節ヲ成ス老成人ト雖氏之ト並ビ駢スルヲ能ハズ天水告
ゲズシテ郷闕ヲ出デタルヲ以テ人皆之ヲ尤ガム天水乃
チ曰ク産ヲ治メ業ヲ廢フハ妹弟ニシテ足レリ大丈夫將
サニ爲スヲアラントスルヤ其始ノ多クハ産業ヲ事トセ
ズ事ヲ好ムデ然ルニハ非ズ彼レ此レト輕重アリテ勢ヒ
兩全ヲ得ザレバナリ吾道義ヲ發揮シ名教ヲ維持シ上ニ
大人ノ心ヲ正シ下モ子弟ノ行ヲ率中往聖ニ繼ギ來學ヲ
啓クハ數頃ノ田ヲ耕ヤシ數斛ノ粟ヲ希ガヒ幸ニ饑寒ヲ
免ガレ朽テ糞土ト爲ル者ニ孰與レゾヤ事業ノ大ナルハ

學問ニ若クハナシ。家ニ居テ能ク千金ヲ致スモ、猶ホ其半ニ比スルニ足ラズ。矧ヤ其富貴必シモ期ス可カラザルヲヤト。天水年二十五ニシテ、青霞亭ヲ城東本街ニ築キ、生徒ニ教授ス。三十歳ニ至ルニ及ビ、其門ニ入ル者、前後總テ五百餘人、井董堂、松浦篤所、大窪天民等、高名ノ士、皆其彙篇中ヨリ出ツ。寛政二年ノ春、疫ヲ病ムデ歿ス。年三十三、其精ヲ著述ニ專ラニスルヲ以テ遺稿若干部アリ。

櫻所子曰ク、天水ハ草莽ノ一布衣、學ニ志シテ窮苦スレモ、少クモ其志ヲ屈セズ。遂ニ大都ニ在テ門戸ヲ張リ、士大夫ヲ教誨スルノ地位ニ至ル。其大丈夫將サニ為スアラントスル云々ノ語、以テ其志ノ遠且ツ大ニシテ、小成ニ安ンズル人ニ非ルヲ知ルニ足レリ。今世志ヲ學業ニ傾ケ、千里笈ヲ負フテ都門ニ遊フ輩、囊底空渴シテ窮苦如何トモスル能ハザルニ際セバ、頓ニ平生ノ志操ヲ挫折シ、復タ學業ヲ勉ムルノ念ナク、水ヲ擔ヒ木ヲ伐リ、自ラ炊爨ヲ執ルノ勞ニ服事スルヲ欲セズ。漫ニ豪爽ノ言ヲ放ニシ、磊落ノ行ニ摸シ、粗暴至ラザル無ク、頗ル醜陋ノ態ヲ極メ、世ノ人ヲシテ言フ可クシテ行ハルベカラザル説ヲ目シテ、書生論ト呼ビ、鄙野ノ行ヒヲ目シテ、書生風ト稱スルニ至ラシムル者ハ、他無シ。其心裡堅忍不撓ノ志ヲ樹立セシ、刻苦進取ノ操ヲ保有セザルヲ以テナリ。呼、明治ノ昭代ニ生レ、口ニ自主獨立ヲ説キ、開化文明ヲ談ズルノ徒ニシテ、寛永時代ニ於ケル、東海ノ一農夫猶平其人ニ耻ル無キ者、幾干カアル。

第十九 石作貞十九ニシテ始メテ學ニ志セシ事

石作貞駒石ト號ス。信濃ノ人。同國福島ノ山村氏ニ仕ス。山村氏ノ冢子良由少フレテ文學ヲ好シ。駒石ガ人タルヲ愛シ。勸ルニ讀書ヲ以テス。始メテ郷先生ニ從テ。四書ノ句讀ヲ受ク。時ニ歳十。九ナリ。其學ニ志シテヨリ。僻邑ノ良師友無キヲ憂ヘ。明和三年ノ春。勢州菜名ニ適キ。南宮大湫ニ學バン。ト請フ。山村氏之ヲ許シ。其給資ヲ厚フレ。以テ行カシム。駒石學ニ志ス。ハ晩キヲ悔ム。日夜誦習シテ怠ラス。寢食ヲ忘ル。ニ至ル。故ヲ以テ其學大ニ進ム。三年ヲ經テ福島ニ歸ル。邑ノ子弟皆從テ之ヲ學ブ者多シ。是ヨリ山村氏愈之ヲ敬愛シ。終ニ室老ト爲リ。治下ノ舉措。其手ニ決セリト云フ。

櫻所子曰。久。年十九ニシテ。始メテ四書ノ句讀ヲ受ク。學ニ

志ス。晚シト謂フベキナリ。然レ氏日夜怠ラズ。三四年ニシテ學ヲ成スニ至ル。之ヲ行旅ノ客ニ譬フ。陸路十里ヲ以テ。尋常旅客一日ノ行程トス。而シテ少ク怠ル者ハ。三五里ヲモ步行レ難カルベシト。雖氏晝夜兼行セバ。二十里若クハ二十里ヲ往クベキガ如シ。運歩シテ怠ラザレバ。跛者ト雖氏猶ホ數千里外ニ達スベシ。健脚ナル者ト雖氏。路傍ノ花ニ戯レ。壚頭ノ酒ニ顛セバ。一里ヲモ行クベカラズ。人才アリ不才アリ。幼ヨリシテ學ニ志スアリ。弱冠若クバ。中年ニシテ。初メテ學ニ志スアリ。其志ヲ起スニ遲速アリ。其學ニ通ズルニ利鈍アリト。雖氏學ムテ怠ラサレバ。共ニ造詣スル所。相殊ナルヲ無シ。特リ學問ノ事ノミナラズ。人生百ノ事業。皆然カラザルハナシ。

第二十 田邊希文孟子ヲ講ズルヲ聞キ志ヲ立テシ事

田邊希文晋齋ト號ス元祿五年京都仙臺侯ノ邸ニ生ル晋齋幼ニシテ夙慧一日郷先生ハ孟子ヲ講ジ人皆ナ亮舜タル可シハ章ヲ聞キ忻然トシテ追慕ハ心アリ謂テ曰ク舉夔伊周企及ス可カラザルガ若シ其他ハ未ダ學ムデ至ル可カラザル者アラズト其長ズルニ及ビ經義ヲ以テ縉紳ハ間ニ稱セラル晋齋京都ニ教授スル一七年其名時ニ著聞ス仙臺侯其為ス所ヲ喜ビ召見シテ月俸三十口ヲ賜ビ別ニ門戸ヲ為サシム儒官ト為リ仙臺ニ移居ス其職ニ在ル二十年其勞ヲ賞シ米地入三百石ヲ加賜ス禮遇甚ダ渥シ幾クモ無クシテ擢デラレテ世子ノ傳トナリ又四百石ヲ加賜ス先キノ加フル所ト併セテ七百石班中老ニ至ル

其殊恩非常世ハ君臣ハ遭遇ニアラズ夫レ仙臺ハ大藩ニシテ貴重ノ臣無キニ非ズ又文學ノ臣少キニ非ズ然レ凡晋齋ノ若ク出身シテ進之シ者ハ未ダ聞カザル所ナリト云フ

櫻所子曰ク中江藤樹ハ大學ノ天子ヨリ以テ庶人ニ至ルマデ壹ニ是レ身ヲ修ムルヲ以テ本ト為スノ章ヲ讀之其品行ヲ鍊修シ遂ニ近江聖人ト稱セラレ其德一地方ヲ薰陶シ歿後猶ホ里閭ノ崇敬スル所トナル田邊晋齋ハ孟子ノ人ニナ亮舜タルベシノ章ヲ講ズルヲ聞キ學ムデ至ルベカラザルナレトシ志ヲ勵マシテ學業ニ從事シ遂ニ大藩ノ中老ト班列スルニ至ル而シテ尋常儒士ハ日ニ孔孟仁義ノ道ヲ談ジ六經ヲ諳ンズルニ至ルモ終生碌々ト

シテ人ノ後ニ在リ、蠹魚ト伍ヲ同ノスルノミ、讀ム所ノ書ハ則チ同一ニシテ、収ムル所ノ結菓、此ノ如クノ差アル者何ゾヤ曰ク唯志ヲ立ソルト否ラザルトニ在ルノミ、之ヲ鑿ノ藥劑ヲ調和スルニ譬フ、庸鑿ノ之ヲ用ユル片ハ、キナ「モルヒネ」ト雖、起死回生ノ功ヲ奏スルニ足ラズ、偶以テ患者ヲシテ夭折ヤシムルノ懼レアルノミ、而シテ良鑿ノ之ヲ用ユルキハ、牛溲馬勃モ善ク人ヲシテ壽域ニ躋ボラシムルノ材料トナルガ如シ、今ヤ開明ノ隆運ニ属シ、我輩ガ蒙ラ啓キ、我輩ガ頑ヲ廉ニシ、我輩ガ懦ヲ起ス、良藥其料ニ乏シカラズ、希羅古賢ノ言行得テ知ルベク、歐米前哲ノ論理得テ聞クベシ、然リト雖、氏假令之ヲ知リ之ヲ聞クニ、躬ニ行フノ志無クシバ、恰カモ庸鑿ニシテ多クノ良

藥ヲ貯藏スルガ如シ、昔日ノ腐儒ト一輩ノ人タラザル者幾ンド希ナリ、思ハザルベケンヤ、

第廿一 永富鳳介幼ニシテ古人ノ節ヲ慕ヒシ事

永富鳳介ハ獨嘯菴ト號ス、長門ノ人、年十一ニシテ、古人ノ節ヲ慕ヒ、經史ヲ讀ムヲ好ム、既ニシテ良師友無キヲ憂ヘ、一夜青錢百文ヲ持テ赤馬關ニ走リ、舟ヲ買テ將ニ東遊セハトス、或人論シテ曰ク、兒ハ實ニ兒ナリ、百錢以テ千里ニ遊ブ可キヤト、鳳介笑テ曰ク、予ハ乃チ何ゾ迂ナル、父母之ヲ聞カハ、人ヲシテ追ハシムル必セリ、固ヨリ遠遊ヲ許サズト、遂ニ京都ニ至リ、居ル下期年、意ヲ得ズシテ歸ル、後チ菽ニ至リ、山縣周南ニ師事シ、晝夜孳々トシテ讀書ヲ廢セズ、群籍ニ涉獵スル、人ニ陪從ス、二十歳ノ時京都ニ遊ビ、

始テ山陽東洋ニ謁ス。東洋其塾ニ寓セシメテ之ヲ優遇ス。鳳介始メ鑿ヲ喜バズ。東洋ノ言ニ感激シ。志ヲ鑿術ニ専ラニス。鳳介東洋ノ門下ニ在ル。其聲名早ク京都ニ著顯シ。後チ大阪ニ僑居スルニ及ビ。其業吉益東洞ト雁行シテ。名聲遠邇ニ喧傳スト云フ。

鳳介鑿ヲ以テ業ト為スト。雖ドモ。其志ハ經世ヲ以テ自ラ任ズ。其言ニ曰ク。道ヲ學フバ。志ナリ。鑿ヲ行フハ。業ナリ。敢テ志ヲ以テ業ヲ廢セズ。業ノ為メニ志ヲ棄テズ。夫レ志ハ勉メザル。可カラズ。夫レ業ハ精ナラザル。可カラズ。櫻所子曰ク。志アリト。雖氏。恆産無ケレバ。以テ其志ヲ成スニ足ラズ。業ニ精ナリト。雖氏。志シナケレバ。解語ノ器械ノ如シ。志ニ勉メ業ニ精レテ。真ニ有用ノ人タル可シ。鳳介

其志八年僅カニ十一ニシテ。決然郷關ヲ去テ。良師友ヲ求ム。其業ハ海内鑿術ノ冠冕タリシ。吁。亦偉ナル哉。

第廿二 宮瀬維翰乞食シテ江戸ニ入リシ事

維翰通稱三右衛門龍門ト號ス。紀州ノ人ナリ。寛保元年ハ四月。笈ヲ負フテ江戸ニ赴ク。驛舎ニテ盜ニ遭ヒ。資銀ヲ喪フ。乞食シテ關ニ入ル。湯島菅廟祠官某ノ家ニ寓スル。下一年ニシテ。後チ湯島切通坊ニ僑居ス。窮迫殊ニ甚シ。傭書シテ食ヲ給ス。嘗テ贄ヲ服南郭ニ委シ。芙蓉社ニ入ル。門下ハ士。其能ヲ妬忌シ。惡聲敷。臻ル。是ニ於テ。快々トシテ望ミヲ失フテ。引去ル。退テ六經ヲ修メ。敢テ世ニ交ハラズ。名聲大ニ起ル。門人益進シ。其業頗ル盛ナリ。諸侯之ヲ聘スル者アリト。雖氏皆辭シテ起タズ。當時文章家ト稱スル者ハ服

南郭餘熊耳ニ推服ス龍門ノ名之ニ亞グト云フ其經義ヲ推ス者ハ太宰春臺宇瀆水ニ減ゼズ晩年ニ至テ交遊海内ニ遍ネシト云フ

櫻所子曰ク龍門初メ江戸ニ遊ブ乞食シテ闕ニ入ル其都門ニ寓スル傭書以テ飢寒ヲ支フ之ニ加フルニ南郭ノ門ニ入り同門ノ士ノ其能ヲ妬ク南郭亦讒間ヲ信ジテ之ヲ厭薄スルニ至ル其困頓思フベキナリ然ルニ龍門屹然トシテ其志ヲ屈セズ終ニ一時ノ文宗タル春臺南郭ト名ヲ齊フスルニ至ル今世學資ノ乏シキヲ訴ヘ衣食ノ計ヲ為サバルヲ得サルヲ以テ眼ヲ戴藉ニ注グノ餘暇無キヲ口實トシ良師友無キキハ學ブヲ得ズト為ス所ノ青年ハ是恰カモ遊手徒食ノ徒資本無キヲ以テ商業ニ從事シ難

シト爲シ田畝ヲ有セザルヲ以テ農タルニ由レナシトシ坐シテ凍餓ヲ待ツト大ニ異ナルヲ無シ視ヨ古來豪農大估富ヲ陶猗ニ比スルニ至リシ者モ其創業ノ祖ハ僅少ノ資本ニ過ギズ一世ノ泰斗タル大學士多クハ學資ナキ貧賤ノ家ニ生レ師友無キ荒僻ノ地ニ長ズ然バ則チ資本ナク田畝無キヲ口實トシテ坐食スルモノハ農商ノ産業ニ從事スルニ志シ無キ者ナリ學資無ク師友無キヲ辭柄トシテ學バザル者ハ學ニ志シ無キ者ナリ然レバ則チ遊手者ハ就産ノ資無キヲ憂ヘズレテ就産ノ志無キヲ憂ヘヨ無學者ハ學資ト師友ノ乏キヲ憂ヘズレテ唯就學ノ志無キヲ慨歎セヨ苟モ之ヲ為スニ志アラバ何事カ成ラザラシヤ若シ然ラズトセバ請フ古來豪富者ノ始祖ト盛名ノ

學士トヲ視ヨ。朱熹ノ所謂萬事成ラザル。須ク吾志ヲ責ムベシトハ。真ニ確言ナル哉。

第廿三 富士谷成章志ヲ專ラニシテ國書ヲ討究セシ車

成章ハ層城ト號ス。皆川淇園ノ弟タリ。幼ニシテ敏慧群兒ニ異ナリ。九歳ノ夏。韓使來聘セシ時。韓人ト筆談ス。其妙齡ニシテ才氣アリ。應答ノ速カナル。韓人亦大ニ驚嘆セリ。長スルニ及び。汎ク群籍ヲ涉獵シ。自ラ以為ク。近キヲ舍テ。遠キヲ求メ。目ヲ賤ム。耳ヲ貴ブ。世人ノ常態ナリ。聖經賢傳ト雖。凡外邦ノ事ノミ。若カズ。吾邦ノ典籍ヲ講習センニハト。是ニ於テ國史律令ヨリ。家乘遺集ニ至ルマデ。遍ク。搜求シテ考覈セザルハ無シ。又國風ヲ學ビ。其咏出スル

所。萬首以上ニ至ル。其詩ヲ賦スルヤ。能ク一夜ニシテ五言律百首ヲ作クレリ。又其咏物ノ詩本邦ノ故事ノミヲ用升。唐土ノ故事ヲ以テ材料トセザルハ。新井白石ガ。日本詩史ニ載スル所ノ雪ヲ咏ズルノ詩ノ外。亦見ザル所ナリトイフ。其造詣スル所知ルベキナリ。今左ニ其扇ヲ咏ズルノ詩一首ヲ録ス。

開時蟻蠓巧搖翅。撮去鷗鷺不發聲。大堰錦波春十里。弘微繡帳月三更。賭棋秀娃裁詞藻。按譜才郎擅品評。祇自五絲縈七骨。由來枉得合歡名。

櫻所子曰ク。近キヲ舍テ。遠キヲ求メ。目ヲ賤ム。耳ヲ貴ブ。ハ。社會ノ通弊ニシテ。善ク希臘羅馬ノ歴史ヲ諳ムズルモ。我邦ノ沿革ヲ知ラズ。徒ニ歐米ノ風俗ヲ尊信シテ。我邦

習俗此ニ超駕スル者アルヲ覺トラス。動モスレバ外人
狡獪詭智ノ鬻ニ倣ヒ。我邦固有ノ良風美俗ヲモ。頑陋ノ弊
習ト併セテ之ヲ棄擲シ。玉石共ニ焚クニ至ラントス。豈ニ
慨然タラザルヲ得ンヤ。視ヨ佛人ハ佛國ヲ稱シテ。歐洲文
明ノ中心トシ。英人ハ英國ヲ稱シテ。地球最第一ノ國トシ。
米人ハ其聯邦ヲ以テ。世界無比ト唱フ。其言稍偏倚スルニ
似タリト雖也。亦愛國ノ心衷。言外ニ溢ル。今世輕佻ノ士。動
モスレバ。歐米ノ文化ニ心醉シテ。自國ヲ輕視ス。何ゾ愛國
ノ心ニ乏シクシテ。遠ヲ求メ耳ヲ貴ブノ甚シキヤ。吁。成章
ノ如キ。識見アル者ト謂フベキナリ。

第廿四 藤鈞寫生ノ妙訣ヲ自得セシ事

藤鈞字ハ景和。若冲ト號ス。享保二年京都錦小路ニ生ル家

商ヲ業トス。若冲幼ヨリ畫ヲ好ム。家貧富饒ナルヲ以テ。厚
値ヲ吝マズ。古畫若干ヲ購テ。之ヲ學ブ。初メ狩野氏ノ畫ヲ
學ビ。其法ニ通ズ。自ラ以為ク。是レ狩野一家ノ法ハ。心吾之
ヲ善クスト雖也。狩野氏ノ圈蹟ヲ脱セズト。之ヲ舍テ。宋
元ノ畫ヲ臨移スルヲ年アリ。然カレドモ心ニ契ハズ。一日
大ニ省悟スル所アリ。庭前ニ坑ヲ穿チ。火ヲ活シ。年來學
ハ所ハ畫軸ヲ以テ。盡ク焚如ニ付シテ曰ク。這箇ノ技術何
ゾ。肩ヲ古人ニ比スルヲ能ハザランヤ。彼レモ物ヲ描クナ
リ。我亦其描ク所ニ由テ。描カバ。是物ト一層ヲ隔ツルナリ。
今ヨリ親ク物ニ就テ。筆ヲ把ルニ。若カザルナリト。是ヨリ
諸ノ禽蟲花卉ヲ熟視シテ。畫カントス。然レモ孔翠鸚鵡ノ
類ハ。常ニ見ルベカラズ。唯司晨禽ハ。人家ニ畜フテ。馴ル

所ノ物ニシテ其毛羽亦五彩ヲ施スベシ。先ヅ是ヨリ始ム
ベシト。數十ノ雞ヲ窓下ニ畜養シテ之ヲ描キ。鍛鍊數年。遂
ニ草木ノ華葉羽毛鱗介ニ至ルマテ。寫生ノ妙ヲ自得シ。筆
ヲ下シ。彩ヲ施ス。渾テ意匠ヲ以テ之ヲ成シ。聊カモ古人ノ
法ヲ蹈襲スルヲ無シ。故ニ終生龍虎鬼神ヲ畫カズ。其繪事
ニ耽ル。此ノ如クニシテ。生産ニ疎キヲ以テ。家道零替シ。口
ヲ畫ニ糊スルニ至レリ。米一斗ヲ以テ一幀ニ換フ。故ニ自
ラ斗米庵ト號ス。

櫻所子曰ク。若冲ノ繪事ニ志スヤ。初メ和漢ノ古畫帖ニ就
テ。習鍊多年。意ニ契ハズ。遂ニ碌々人ノ後ヘニ在ルヲ蓋テ。
更ニ實物ニ就テ精研シ。以テ寫生ノ妙訣ヲ自得スルニ至
ル。今世口ニ經世濟民ノ學。強兵富國ノ術ヲ談ズルノ徒。尚

ホ碌々人ノ糟粕ヲ哺ヒ。一隅ヲ得テ前賢往聖ニ彷彿タル
コヲ思ハズ。翻テ他ヲ罵テ。獨立自主ノ氣象ニ乏シ。ト為
ス。何ゾ其顔ノ厚キヤ。

第廿五 休翁晚年國歌ニ志セシ事

休翁ハ和泉國堺ノ豪商ナリ。茶儀ニ熟セリ。其奴僕ヲ遇ズ
ル骨肉ノ如クス。故ヲ以テ家道日ニ盛ンナリ。或時京師ニ
至リ。初メテ某大納言ニ謁ス。談國歌ニ及ブ。大納言曰ク。汝
ハ和歌ヲ學ベルヤト。曰ク。未ダ之ヲ學バズ。曰ク。然ラバ我
レ汝ガニ語ラン。凡ソ一家ノ主翁トシテ。多クノ奴僕ヲ使
役スル者ニシテ。心ヲ文雅風流ニ留ムルヲ無クンバ。則チ
其爲ス所備固ニシテ。一片ノ和氣無シ。修身齊家ノ道ハ。和
ヲ知テ和シ。禮ヲ以テ之ヲ節スルニ非レバ。人服セズ。且ツ

版ノ國歌ヲ誦ス。半之丞問テ曰ク、誦スル所ハ何事ゾ。曰ク、和歌ナリ。曰ク是レ上古神明ノ傳フル所ナルカ。將夕人ノ作ル所ナルカト。客笑フテ曰ク、亦人ノ作ル所ノミ。曰ク、學ムテ能ク不可キカ。曰ク、然リト。因テ略其法ヲ授ケ。且ツ曰ク、歌ハ至誠ヲ以テ本ト為ス。此ヲ以テ心ニ存シ、感觸シテ言ニ發スレバ、以テ天地ヲ動カシ、以テ人神ヲ感ズベシト。半之丞大ニ悦ビ、謝シテ還ル。茲レヨリ志ヲ國風ニ留メ、喜^レ悲^レ笑^レ驚^レ凡^レハ耳目觸ル^レハ、所^レ心意動ク所^レ一^レ皆之ヲ詠歌ニ發ス。半之丞本ト眼ニ一^レ下無^レシ。故ヲ以テ意餘リアツテ言達セズ。人傳テ以テ笑資ト為ス。而シテ半之丞恆ネ曰ク、卒然法ヲ祠前ニ受ク。吾歌必ズ明神ノ冥贊ニ出ヅ。然ラズニバ吾儕鄙人惡ンゾ能ク斯ニ與カラシヤト。自ラ信レテ

疑ハズ。其天資朴直ナル。大率ネ此ニ類ス。村淡路守戸田侯ノ封邑ニ係ル。代官某國歌ヲ善クス。其志ヲ嘉ミシ。時ニ往テ古歌ヲ講授シ。且ツ其詠ズル所ヲ剛正シ。為ニ國字ヲ書レ與ヘテ之ヲ學バシム。居ル數年。詞稍修マル。期滿チテ代官還ル。吉田驛藥舖ノ嫗歌ヲ大納言芝山持豐ニ學ビ。名旁近ニ噪ク。代官ニ繼^テ諄^ニ誨^ス業大ニ進ム。其合作ニ至テハ天趣高絶。古人及ビ易スカラザル者アリ。或時嫗ニ從テ京都ニ至リ。大納言ニ謁ス。試ミニ命ジ。寄道戀ヲ詠ゼシム。納言吟誦數回。稱シテ曰ク、是レ洵ニ純乎タル天籟。自然格ニ入ル。思ヒ邪マ無キニ非ズンバ。何ヲ以テカ之ヲ能クセン。圖ラザリキ。古人ヲ今世ニ視ントハト。咨嗟之ニ久シ。因テ蹄ヲ磯丸ト賜ヒ。為ニ之ヲ掄揚ス。名衣冠ニ嘖々タリ。還ル

ニ及テ遐邇傳稱シ、以テ奇榮ト為ス。天使東下、及ヒ公卿ハ東海ニ過グル者、往々迂路其廬ヲ訪フ。名聲隆々トシテ起ル、是ニ於テ土人相議シテ曰ク、吾土僻陋ニシテ、衣冠親臨スルハ未ダ嘗テアラズ、而シテ今始メテアリ、土人榮々ル大ナリ、而レテ敗屋陋窶ナル、亦土人ハ辱ナリト、因テカヲ戮ハセ、貲ヲ捐テ、屋ヲ構ヒ、之ヲ與フ、且ツ推シテ里正ト、為ス、磯丸大ニ愕キ、堅ク拒ムデ曰ク、吾無能無識ニシテ且ツ寒族タリ、何ゾ敢テ當ランヤト、衆強テ舍カズ、因テ里正ヲ辭シテ其居ヲ受ケ、但名流ノ過クル毎ネニ之ヲ此ニ延ク、去ルニ及ベバ、輒チ鎖鑰シ、家ニ還テ漁具ヲ修繕シ、兒孫ト事ニ從フ、未ダ嘗テ諷詠ヲ以テ發ヲ廢セズ、磯丸嫁娶事畢リテ江戸ニ遊ブ、公侯爭テ之ヲ延ク、遠藤但馬守新見

伊賀守ニ氏尤モ之ヲ寵異ス、常ニ二氏ノ邸ニ宿ス、水南文亮、高千春ト密友タリシトイフ、對シテ對シテ、櫻所子曰ク、磯丸僻郷ノ寒族、然カモ本ト丁字ヲ知ラス、遂ニ國風ヲ以テ名ヲ月卿雲客ノ間ニ揚ク、是レ其居心制行正直ニシテ、語默動靜、造次顛沛、意志ヲ國歌ニ注ギ、其諷詠スル所、思ヒ邪マ無ク、三百篇ノ作者ト、其妙ヲ同フスル所以ナリ、命意新ナリト、雖氏措辭巧シナリト、雖氏言苟モ偽飾ニ出ツレバ、假令太平ヲ粧點シ、休明ヲ鼓吹スルノ一端ニ供スベキモ、何ゾ天地人神ヲ感動スルノ妙處ニ達スルヲ得ンヤ、況ヤ假リテ以テ桃李ノ妖色ヲ賣リ、花鳥ノ使音ヲ通ズルノ具ト為スガ如キニ至テハ、其風俗ニ害アル大ナリ、磯丸ノ事、其篤志ト至誠トハ、以テ學術技藝ヲ講習ス



ル者ノ模範ト為スベレ。豈ニ特リ國風ノミナランヤ。

第廿七 佐藤隆岷葵章ノ衣ヲ被ルヲ誓ヒシ事

佐藤隆岷ハ會津ノ人。活菴ト號ス。少フシテ志氣ヲ負ヒ。名ヲ天下ニ成サント欲ス。其初メ郷關ヲ出ル。自ラ誓テ曰ク。吾葵章ノ衣ヲ衣ズンバ。復タ生キテ還ラズト。葵章ハ即チ幕府ノ徽號ナリ。江戸ニ來リ故人某ニ依ル。某ハ賈人ナリ。專ラ會計ヲ事トス。隆岷久レカラズレテ乃チ去ル。然レモ常居無シ。處士ヲ以テ高門雅子ノ家ニ客タリ。喜ムテ書ヲ誦シ。易論語老莊傷寒論古今和歌集ヲ背誦ス。最モ軒岐氏ノ術ヲ好ム。其術ニ於テ自得スル所アリ。然レモ其性善ク罵ルヲ以テ世人為ニ容ラレズ。僅カニ按摩ヲ業トシ。以テ活ヲ為ス。時ニ夕留橋ニ酒店アリ。鰻炙ヲ以テ名アリ。每暮

客三人アリ來リ喫ス。鰻一碟酒一鉢。是ノ如クスル者數歲未ダ嘗テ一タモ之ヲ廢セズ。主人恠ムテ之ヲ問フ。皆云フ。吾輩風志アリ。成ラザルヲ恐ル。故ニ此ニ藉リ。以テ氣力ヲ助クルハ心ト。三人其二ハ行商。其一ハ隆岷ナリ。之ヲ久クシテ隆岷一屋ヲ芝濱ニ僦レ。既ニ屋值ヲ與フ。屋主更ニ酒資ヲ索ム。應セズ。則チ中ルニ冷語ヲ以テス。隆岷大ニ怒テ之ヲ罵ル。偶任俠某ノ過ギ觀ルアリ。曉諭兩解ス。遂ニ隆岷ヲ引テ歸リ。款待甚ダ至ル。某多ク拳勇少年ヲ養ヒ。歸レテ兒分ト曰フ。是ニ於テ人ニ告ゲテ曰ク。吾奇兒ヲ得タリト。隆岷之ヲ聞キ罵テ曰ク。吾豈ニ汝輩ノ養子タルモノナランヤト。某謝シテ留ム。肯ンゼズ。袂ヲ振テ去ル。初メ荒川土佐守ノ妻疾ム。十餘年鑿藥一効無し。隆岷ヲレテ之ヲ診

セシメ、試ニ處劑如何ト問フ、隆岷忽チ罵テ曰ク、君ハ醫人ニ非ズ、焉バ醫術ヲ知ラシ、然レ氏吾ガ術疎ニシテ人ノ為ニ信ゼラレズ、亦愧ルニ足ルハシ、即チ拳ヲ奮テ藥籠ヲ打破シ、泥然トシテ去テ顧ミズ、土佐守曰ク、奇士ナリ、術モ亦應サニ奇ナルベシト、乃チ疾ヲ治セシム、遂ニ痊ユ、然ル後、名大ニ發ス、土佐守清水府ノ老ト為ル、及ビ建白シテ、其侍醫ト為ス、是ニ於テ隆岷、葵章ノ衣ヲ賜ヒ、果シテ其誓ヒヲ遂グ、向キノ二商モ亦各其志ヲ成スト云フ。

櫻所子曰ク、舊幕ノ時葵章ノ衣ヲ服スル、未ダ駟馬ノ車ニ比スベキニアラザルモ、亦以テ衣錦ノ榮ニ視ラフベシ、隆岷東轍ノ一布衣ニシテ、其郷土ヲ去ル、葵章ノ衣ヲ衣ズンハ、復タ生還セザルヲ誓フ、其志ヲ立ツル小ナリト謂フベ

カラズ、而シテ其性善ク罵ルモノ、固ヨリ美德ニ非ズト雖、氏之ヲ門ニ掃ヒ塵ヲ拜シテ、俸給ヲ得ントスルニ及々タル者ニ比スレバ、固ヨリ日ヲ同フシテ論ズベキニ非ズ、且ツ人ノ為メニ知ラレズ、按摩ヲ以テ生計トスル、數年ノ久キニ及ブガ如キ、亦耐忍ノ至レルモノニアラズヤ、其狷介ニシテ世ニ阿ラズ、言行ノ奇ナルヲ以テ、遂ニ荒川土佐守ノ知ル所トナリ、葵章ノ衣ヲ衣ルノ誓ヲ遂グルニ至ル、亦奇遇ナリト謂フベシ、我便倭ヲ以テ榮華ヲ博セントスル者アルヲ視ル、而シテ狷介ニシテ且ツ善ク罵ルヲ以テ、利達ヲ得ル者ハ、隆岷ニ於テ始メテ之ヲ視ル、是蓋シ其志操ト、勉耐トノ尋常ニ超出スルガ致ス所ナリ。

山岡紀一郎志ヲ槍法ニ專ニシタル事

山岡紀一郎靜山下號ス江戸ノ人家世幕府ニ仕テ其人ト
ナリ剛直ニシテ阿ネラズ朴素ヲ重ニシ氣節ヲ尚トズ靜
山幼キ時刃槍射騎水泳讀書習字發憤勉勵セザルハ無シ
年十九ノ時省悟スル所アリ慨然トシテ曰ク我レ今ヨリ
精ヲ專ラニシ槍ヲ學バンハミト二十二歳ニ及ビ名都下
ニ轟ク用ユル所ノ長槍刃心槍ト曰フ其源菅丞相道真ヨ
リ出ヅト云是時ニ當リ筑後ノ人南里紀介技ヲ以テ海内
ニ鳴ル靜山就テ問フ南里將サニ國ニ歸ラントスルヤ靜
山ト一夕ビ較ベ以テ訣別ヲ告ゲント欲ス是ニ於テ試法
ヲ相較ス辰ニ起テ午ニ至ル神出鬼沒輪贏未ダ判ゼズ操
ル所ノ各槍鋒尖摧破シテ寸餘無シ以テ靜山ノ技當時ノ
槍術者流ガ精神活潑ノ妙機ヲ失シ血戰ノ實境ヲ遺レ徒

ニ花法美觀ヲ務ムル者ト相同ジカテザルヲ見ルニ足レ
リ嘗テ疔ヲ鼻下ニ發ス痛甚シ技ヲ操ル常ハ如シ鑿之ヲ
止ムレ氏聽カス月餘ニメ愈エ又瘡ヲ患フ顫起ル毎ニ場
ニ入テ弟子ト技ヲ較ス此ヲ以テ瘡ヲ去ル靜山操ル所ノ
木槍重サ四斤ナル者七斤ナル者十五斤ナル者アリ其槍
ヲ學ズ勉強凡ニ非ラズ嘗テ昇平日久フシテ士風ノ柔惰
ナルヲ概シ自ラ古ノ士ニ企及センコトヲ期シ緩急用ニ應
ジテ國難ニ徇ヒ以テ士職ヲ盡サンコトヲ庶幾スルヤ嚴冬
寒夜繩ヲ以テ腹ヲ約シ氷ヲ敲キ水ヲ灌ヤ滿身淋漓タリ
東ニ向テ日光廟ヲ拜シ叩首默禱且時場ニ入り十五斤ノ
槍ヲ操リ突衝ノ勢ヒヲ作ス丁一千回三十夜ヲ極メテ止
ム毎年此ノ如シ平居晝八門人ニ教授シ夜ハ則チ突衝ノ

勢ヲ作ス丁三千或ハ五千或ハ黄昏ヨリ雞鳴ニ至ルマデ
三萬ニ及ブ嘗テ竹七八尺計リヲ斫リ之ヲ把リ高履ヲ踏
ムデ弟子ト試較ス槍ニ異ナラス或ハ鐵扇ヲ操リ以テ槍
手ニ敵ス靜山技術既ニ神妙ト稱ス又德義ヲ以テ聞ユ嘗
テ西郊ノ佛寺ニ賽ス衆アリ二十人バカリ一人ヲ圍繞シ
拳捷交下ル鮮血淋漓死ニ垂ントス靜山衆ニ謂テ曰ク何
物ノ狂奴ゾ敢テ毆撃ヲ行フト地ニ僵ル者哀叫シテ曰
ク山岡先生請フ我ヲ救ヘト靜山衆ニ對シテ懇諭スレ氏
聽カズ是ニ於テ群中ニ突入シ喝シテ曰ク窮鳥懷ニ入ル
獵夫殺サズ况ヤ士人ノ救ヒヲ求ム而シテ我豈坐視スル
ニ忍ビシヤ汝デノ敵ハ即チ我ナリ請フ來テ我ト戰ヘト
衆敢テ動カズ靜山地ニ僵レタル者ヲ視レバ乃チ舊ト嘗

テ贖ヲ執リ枝ヲ習ヒ後チ背キ去リシ者ナリ其人金ヲ取
ニ借テ還リズ故ニ今此厄ニ遭フ靜山金ヲ懷ニ取リ其負
債ヲ衆ニ償ヒ別ニ數金ヲ取テ其人ニ與ヘ規箴ヲ加ヘテ
之ヲ遣ル靜山嘗テ人ニ語テ曰ク凡ソ人ニ勝タント欲ス
レバ須ク先ヅ德ヲ己レニ修ムベシ德勝テ敵自ラ屈ス是
ヲ之レ直勝ト為ス若シ枝藝ハ擊刺ニ由テ得可シト謂ハ
バ則チ大ニ謬レリ枝ニ精シカラント欲スレバ須ク先ヅ
飲酒遊行ヲ禁ズベシ必ヤ時トシテ精神ヲ枝ニ存セザル
ハ無ク往クトシテ着實事ヲ行ハザルハ無シ則チ妙境ニ
臻ル度幾ス可キナリト又曰ク人ノ宜ク戒ムベキ者ハ驕
傲ナリ一驕心ニ入レバ百藝皆廢ス既往ヲ回視スレバ我
モ亦免カレズ一念此ニ至ル毎ニ慚汗背ニ洽ホスヲ覺エ

日本書紀卷之八十一
ガハナリト。安政二年六月暴カニ歿ス。年二十七。其歿スル
ニ先ダツ一日。母氏静山ノ重槍ヲ使フヲ視。其太夕憊ルハ
ヲ患フ。静山曰ク。兒之ヲ操ル手槍ト異ナル無キナリト。翌
日。曉ヨリ諸弟子ト操習スル常ノ如シ。但肉色頗ル白ク。肌
膚澤無キヲ見。弟子以テ告グ。静山笑テ言ハズ。是日ニシテ
卒スト云フ。

櫻所子曰。攝人市村水杵カ釣魚記ヲ讀ム其文ニ曰ク。吾家
澱江ニ瀕ス。江ニ一漁者アリ。釣鯉ニエミナリ。他人及ブ能
ハズ。吾嘗テ其術ヲ問フ。漁者曰ク。他無シ。專ト精トニ在ル
ハ。初メ余ノ釣鯉ヲ學ブヤ。終日ニシテ一ヲ獲ズ。是ノ如
キモノ。數十日退テ之ヲ思フ。曰ク。是餌ノ香シカラザルナ
リ。器ノ良カラザルナリト。乃チ其餌ヲ香バシフシ。其釣ト

竿トヲ良クシ。往テ釣ル。又獲ル所無シ。是ノ如キ者數十日。
退テ再ビ思フ。曰ク。是レ徒ニ餌ノ香バシキノ。器ノ良キ
ノミ。未ダ其方ヲ獲サルナリト。是ニ於テ晨起江ニ到リ。右
視右顧。水ノ深淺ヲ測カリ。鯉ノ游泳ヲ窺テ釣ル。須臾ニシ
テ一大鯉魚アリ。潑刺トシテ釣ニ上ホル。是ヨリ復タ虚餌
無し。世ノ江ニ釣ル者。鯉ヲ釣テ獲ザレバ。輒チ去テ鯉ヲ釣
ル。鯉ヲ獲ザレバ。輒チ去テ鯉ヲ釣ル。終ニ一ヲ獲ル能ハズ。
是豈釣魚ニ拙キノミナランヤ。其心專ラニシテ思ヒ精チ
ラザレバ。ナリト。吾之ヲ聞テ感ズル所アリ。世ノ藝ヲ學ブ
者。書ヲ學ムデ成ラザレバ。輒チ去テ文ヲ學ヒ。文ヲ學ムデ
成ラザレバ。輒チ去テ詩ヲ學ヒ。畫ヲ學ブ。其心專ラナラズ。
思精カラザル。是ノ如シ。宜ナル哉。其成ル所無キヤ云々

ト我此文ヲ讀ムデ以爲久斯言ヤ以テ能ク今世人士ノ膏
育ヲ鑿スルニ足ル者ニシテ韓昌黎ノ所謂外慕業ヲ徒ス
者ハ皆其堂ニ造タラズ其裁ヲ嚙ハザル者ナリトノ意ニ
符合ス實ニ警世ノ文字ナリト然ルニ靜山年僅カ二十九
ニシテ早ク已ニ茲ニ見ルアリ讀書習字射騎水泳ノ諸科
ヲ舍テ專ラ槍法ノ一技ヲ攻ム卓見ト謂フベキナリ一
藝アル人ハ皆ナ語ル可シトイフ亦宜ナル哉今世ノ少年
才子ガ朝夕ニ英籍ヲ翻ヘレタベニハ佛籍ヲ繙キ時トシ
テハ漢籍ヲ學ビ又ハ魯獨ノ語學ニ轉ビ暇アレバ則チ書
法ヲ攻メ畫本ヲ披キ碁局ニ對シ百藝悉ク通セント欲シ
テ一トシテ其堂ニ造ル能ハズシテ身ヲ終フルコトヲ曉ト
ラザルカ如キ靜山ト漁人ノ爲ニ笑ハレザル者幾ンド希

ナリ且夫靜山ガ其德勝テ敵自カラ屈ストイヒ技ニ精ナ
ラント欲スレバ須ク飲酒遊行ヲ禁ズベシトイヒ一驕心
ニ入レバ百藝皆廢ストイフガ如キハ蓋シ實踐ニ得ル所
ノ言ニシテ古賢前哲ノ訓誨ニ密合ス亦以テ一技一藝ニ
長ゼント欲スル者ヲシテ其品行ヲ慎シマシメ其驕慢ノ
隆準ヲシテ低クカラシムルニ足レリ而シテ其勉強刻苦
少クモ懈ラザル歿スルノ日ニ及ブマデ重槍ヲ揮ヒ諸弟
子ト操習セリトイフガ如キ後進ノ士ヲシテ一讀ノ下ニ
感發奮興スル所アラシム吁靜山亦豪傑ノ士ト謂フベキ
ナリ

第廿九 藤田斌卿年弱冠ヲ踰エテ學ニ志セシ事
幕府政ヲ失フノ時ニ當テ尊王攘夷ヲ首唱セル所ノ傑士

先後競テ起ル。而シテ海内ノ士。人才ヲ論ズル者。先ツ指ヲ
藤田東湖ニ屈ス。東湖ハ即チ斌卿ノ孫ナリ。斌卿ハ常陸ノ
人。世水戸藩ニ仕フ。斌卿幼ニシテ奇穎。稍長ジテ武藝ヲ嗜
ミ。甚ダ讀書ヲ喜バズ。日ニ馬ヲ馳セ。劍ヲ試ム。年弱冠ニ踰
エ。慨然トシテ自ラ奮テ曰ク。絳灌文無ク。隨陸武無キ。古人
ノ笑フ所。丈夫何ゾ學バザランヤト。遂ニ刻苦書ヲ讀ミ。父
ノ喪ヲ守ル。進物番ニ補シ。彰考館編修ト為リ。總裁ノ事ヲ
攝ス。斌卿書ヲ總裁ニ致シ。館中ノ五事ヲ論ズ。文辭雄健ナ
リ。人始メテ其カヲ學ニ專ラニセシトヲ知ル。黃門齊昭ハ
初メ封ヲ襲フ。斌卿ノ異オアルヲ知リ。擢テ、郡奉行ト爲
ス。三タビ遷テ側用人ニ至リ。馬廻番頭ニ班ス。侯方ニ一藩
ノ人才ヲ網羅シ。内外ニ布列シ。皆稱シテ職ニ稱フト為ス。

而シテ古今ニ通ジ。事體ニ達スルニ至ラバ。則チ斌卿蓋シ
之ガ冠タリ。故ニ侯ノ眷遇尤モ渥シ。入テハ則チ機密ニ參
與シ。出テハ則チ四方ニ應對シ。議論風生ジ。事留滯無シ。侯
新令ヲ出ス。毎ニ斌卿一ニ筆ヲ秉リ。頃刻ニシテ成ル。辭理
明暢ナリ。當時水藩文武ノ士。其人ニ乏シカラズト雖。氏斌
卿ヲ推シテ全オト爲ス。侯ガ施為人ノ意表ニ出テ。人ノ耳
目ヲ驚カセシ者。斌卿尤モ力アリトス。弘化元年斌卿罪ヲ
獲テ。小梅村ノ別墅ニ屏居ス。爾後專ラ學ヲ攻メ。群書ヲ覽
閱ス。數歳ニシテ郷里ニ歸ルヲ聽ルサレ。尋デ亦親故ト往
來スルヲ得。遠近教ヲ乞フ者。日ニ門ヲ填ム。嘉永六年。侯命
ヲ幕府ニ受ケ。防海ノ政ヲ議ス。乃チ斌卿ヲ召ス。江戸ニ至
テ原職ニ復ス。天下風采ヲ相望ス。而シテ斌卿夙トニ尊攘

ノ大義ヲ主張ス。然レモ持論トスル所。或ハ時ト抵悟スト。雖モ報國ノ誠ハ則チ確然トシテ撓マズ。侯又斌卿ガ才文。武ヲ兼スルヲ必テ命ジテ學政ヲ總督セシム。幾クモ無ク。江戸地大ニ震フ。斌卿是日ニ於テ歿ス。享年五十。即チ安政二年十月ナリ。櫻所子曰ク。東湖ガ尊攘ヲ主唱シ。名聲一時ニ甲タル者。常ニ異能ノ士ヲ延キ。酣暢談論シ。時ニ或ハ詩賦唱酬。詞采煥發。能ク憂國ノ志士ヲシテ一讀ノ下ニ切齒扼腕セシムル者アルニ由レリ。而シテ其學ニ志スハ。弱冠ヲ踰ユルノ後ニ在リトス。年已ニ長ジタルヲ以テ。學ブ能ハズト謂フ者。何ゾ。慨然トシテ自ラ奮ハサルヤ。日本立志編卷二終

明治十二年十一月十五日版權免許
同 二十年九月十九日七版御届

著述者

福島縣平民

干河岸貫一

東京府下本所區外手町三拾九番地寄留

出版人

大阪府平民

吉岡平助

府下東區備後町四丁目三十七番地

出版人

大阪府平民

前川善兵衛

府下東區南久宝寺町三丁目八番地

